

須賀高等女學校校友會誌

(學校保存)

ひ め ま つ



創
刊
號

須賀高等女學校文藝部

發刊の辭

學校長 相馬清五郎……………(一)

名譽校長 須賀友正……………(三)

編輯 想曲……………(三)

蛙 聲……………(三)

職員 川俣南軒……………(三)

雜 感……………(二)

職員 灰野 潤……………(二)

街 燈……………(三)

職員 大出光威……………(三)

日本の心 (特別寄稿)

手塚 武……………(三)

枯木集
山麴集

職員 句集……………(二)
職員 歌集……………(五)

名曲鑑賞

文藝部音樂鑑賞班……………(四)

新憲法の基本原理

職員 須賀 淳……………(三)

生徒作品

小品・童話・詩・短歌・俳句

◇校友會部報……………(六)

◇學校日誌……………(七)

◇編輯後記……………(三)

目次

發刊の辭

學校長 相馬清五郎

文藝が心の糧として、また文化日本建設のための一翼として、大事な役目をもつて居ることは今更
くどくどしくいう必要はないと思うが、殊に現時のように人の心が生活におわれて荒切つて居る
時に、うるおいのとりとを與へて、人生そのものを、しつくりと味はせ、物質以外の生活の貴と
さを感じさせるために、一日も早くこの方面の研究に、力を入れなければならないと思つて居たの
であつた。然るにこんど、生徒自發の努力によつてこの文藝雜誌の出來上つたことは私として誠に
喜びに堪へない次第である、勿論内容そのものについては、貧弱とか幼稚とかのそしりはあるだろ
うが、それは一つの階段であつて、何物でも生れながらにして、一足跳びに大人に成ることのでき
ないのと同じだから今後の努力によつて逐次の進境を望むより仕方が無い。只その眞摯の態度が喜
ばしい、文藝は情緒主觀を本體とするものであるが、それが環境即時代精神に影響せられて、時代
時代の特質をもつ事になる、今やわが國は舊態一拋新たる様相によつて起ち上らねばならぬ時で
ある、従つて文藝に於ても傳統の踏襲のみでは許されぬ、活氣と希望とに充ちた新興の精神によ
つて色づけられねばならないと思う。本誌が明朗雄大なる建設的文藝の芽萌としてすすくと伸び
行かんことを希念して巻頭の言葉とする。



斷想

名譽校長 須賀友正

珍らしく家族がみんな外出して、静かな日曜の午後、新聞に読みつかれて、ふと床の間に眼をやると、誰かが買ってきた飾つたのか、一鉢の福壽草がいくつかの黄色い花を咲かせてゐた。

「ほう、福壽草が……」思はず聲に出して、さう感嘆した私は、立つて行って花の一つ一つに見入りながら、今さらのやうに、あはたらしい毎日の生活を思ふのだつた。

仕事に追ひつめられてゐる毎日は「花を忘れてゐる」毎日である。戦争中はもちろん、現在もまた、私達日本人の大半の生活は、ほとんどこの「花を忘れてゐる生活」といつていいのではないからうか。余裕のないところに文化は興らない。物質的にめぐまれない敗戦の生活の中にも、私たちは文化の糧を増ふ精神的余裕を持ちたいものである。

戦災バラックの部屋にも、教壇にも、一輪の花を飾らう。ぼろぼろの壁にも一枚の風景畫をはらう。額ぶちは粗末でも、あるひは額ぶちはなくとも、床しい人の心は美しく、明るく匂ふだらう。

敗戦後の日本はあらゆるものが缺乏してゐる。みんな大砲や鐵砲だまとなつて、太平洋戦争に消耗されてしまつたからだ。恐るべき缺乏の中から物を生み物をふやして行かなければならない。それには戦争中にもいはれた創意工夫が、以前にもまして必要なのである。科學、技術の進歩發達が重要な位置をしめることになる。家庭生活の科學化といふことは生産の科學化といふことと同じことである。

まもなく學窓をはなれて行く生徒達がある。別れはつらい。みなさんの出て行く、社會は今荒んでゐる。泥濘にそまるな。しつかりと、正しい倫理觀に基いて、強く生きてほしい。

枯木集

雪解けの雫もゆるく晴衣縫ひ	北山シゲノ
初雪に南天の實の赤さかな	
一椀の味噌汁あつし雪の朝	渡邊 甲
白梅のよわい重ねしめざめかな	
寒あけて雨をもよほす暖かさ	岩崎 益子
よるべなき冬の野川の魚かな	
ありし日の父をしのべる夜長かな	麻生 芳枝
草かげに虫の鳴く音や秋の暮	
初霜や我訪ふ家の朝煙り	川俣 南軒
風寒し麥ふむ畑に陽は斜	
行く雲や遂には濡るゝ初時雨	
梅一輪子等の手折りて春立ちぬ	大村 妙子
夕暮れて子等は出でゆく火の見張り	渡邊 ユキエ
星凍る空に吸はるゝ想あり	小林 廣吉
福は内聲もたからか垣根越し	波木 知世子
春の雪麥三寸の青さかな	大出 光威
見返ればはや消えにけり今朝の霜	
雲はれて波靜かなり冬の月	二月一日夜

心

四年 原 初江

人は成長するにつれて何時の頃からか嘘をつき始める。最初は自分の舌の犯した罪の餘りにも重い事に驚いて、強く良心の呵責を感じるが、併しやがて二度三度……とその罪を重ねて行くにつれて呵責の度は薄らぎ恬然として恥ぢない様になる。何と怖しい事であらう。私は何時も、此の事を考へると慄然たらざるを得ない。

如何なる邪悪な人間でも生れ乍らに邪悪な心を抱いてゐる者はない、「赤子の心」それは此の上なく尊い純心なものである。母の優しい御手に懷かれて静かに眠る嬰兒の心。それはあたかも春の精でありエンゼルの心である。

如何なる大聖人も或は大叛逆者でも母の胸にゐる時は誰でも雪白の様な心である。然し、だんぐりちゑがつくと同時に、人を瞞すといふ事を知る。生れ乍らに純潔な心が、備はつて居るにも拘らず自分の良心に反してこれを行ふ、即ち大聖人とか、賢人とか言ふ者は生れ乍らに備はつてゐる實をその儘持續してゐるものである。私達の心に拭ふべからざる汚點が擴がつて行くのは、環境の所爲にして仕舞ふが、併しより善く生きるには、己の環境を

征服しなくてはならない、生れ乍らの心こそ私達の最も尊べきものである。自然の心！それは何物にも譬へ様なく貴ぶべきものである。

讀書に就て

二年 加藤利子

私達が本を讀んで、面白みが起つて來ないといふのは、罪がその本にあると云ふ事は出来ません。讀書をするには方法があります。本を讀むのではなく本に讀まれる様な受身の讀書では害にこそなれ役にはたしません。讀んだ事を、それが何を言つてゐるかを、はつきりと掴む様にしなければなりません。私達は誰も、自分は讀み方、書き方を知つてゐると思つてゐるでせう、然し眞に良く讀み、良く書けると云ふ人は極く少いものです。唯行に沿ふてぼんやりと機械的に目を走らせ、頁をめくるのでは眞に讀むとは言へません、その本に寫されてゐる場面と述べられてゐる人物をはつきり掴んで想像力を十分發揮して思考するのです。書の選び方私達が良い友達を選ぶ様に慎重になさるべきです。我々は自分の爲す事に就て責任を持つ様に讀む事に就ても責任を負はねばなりません。ミルトンは「良書とは死後迄も生きる様に、わざ／＼香料を用ひて寶藏せられた偉人の尊い生血である」と言つて居ます。

蛙

聲

上手な手紙

手紙が上手に書ければとは誰も望むところであるが、さて仲々うまく行かないものである。手紙を上手にかくには矢張りうまい人の手紙を明け暮れ眺め、文字の大小の調和とか、かなと本字との割合とか、續け工合とか、墨の繼ぎ方だとか云ふ様なことを心行くまで見てスツカリ自分のものにした上で、よしこゝだといふ所を書くようにすれば上手にできる様である。私は丹羽(海鶴)先生や田代(秋鶴)先生から手紙を戴くと、寝るにも枕元に置いて、目がさめればながめたものである。又何回か眞似てもみた。昔の人の手紙などなか／＼味のあるものがあるし、文章などもうまい。やはり人物が出来るから、自然それが手紙などにも現はれて來るのだと思ふ。

一寸こりや上手だと思つても、見てゐる中にだん／＼いやになるものがある。よし何とかこれはと驚かす様なものを書いてやらうと云ふので餘りつくり過ぎて見てゐるうちにそれが鼻についてくる。藝術にはつくるとは禁物で、寫眞など撮る時にサ／＼うつつりますますよといはれると變じると大變だと云ふので緊張してしまつて寫つたのを見ると、すまして反つて變に撮れてゐる。

ある有名な寫眞屋で、うつつして貰つた或る人の話であるが、大抵パチンとやる前に「サア撮しますよ」とやるが、何とも云はない。あの長いゴム管の先に玉のついたのを握つて、あちらこちらに歩いて、撮す人の恰好を直したり何かしてゐる中に「お待ちさま、もう済みました」といつて何時の間にか寫してしまつた。撮つて貰つた方では何時うつつされたか分らない。キツト變な工合に撮れてゐるにちがいないと心配してゐる所へその寫眞が届いた。急いであけて見ると何とそれが非常によくとれてゐたといふことである。

手紙を書くにもうまくかいてやらうと思つて強いて技巧をこらすと却つて工夫負けがして嫌味なものになり易いものである。

上手な人の手紙のこゝだといふところを掴んで、坐つて書いても、立つてかいても、そのうまさの變らぬ所まで行かぬと眞物でない。

見れば見る程よいと云ふものでないと本當の上手とはいへないし、味のだん／＼出て來るものでなければ本當に上手な手紙と云ふことは出來ないと思ふ。川俣南軒

家なき兒

無名子

八月も終りに近い或日、上野驛正面口から地下道の中へ急行券を買ふ行列が續いてゐる。この行列を、二、三と頼んで數へ乍ら列の後の方へ進んで行く男がある。でつぷりと肥え、恵比壽顔見のからに子供好きのやうな小父さんポストンバックを重さうに不けて行く、やがて構内食堂の前の階段で列は終つてゐる。八十位迄數へたらしい、階段に下カリと腰を下ろして行く、退屈まきれに煙草をふかしてゐると、子供が二人何かを物色し乍ら列の前の方からやつて来る。

「一人はやせてヒヨロ長く薄ギタない見るからに浮浪兒らしく年は十七、八才も一人はボツチリとした丸顔、小柄な可愛い兒小な登山帽を頭に載せて開襟シャツに半ズボンさつぱりしてゐて一寸見ても浮浪兒とは見えない、十五才位の少年、小父さんの顔を見て此の二人はニコリと笑ひかける少年の類には笑くば可愛らしく浮ぶ。」

「小父さんこんな後ちや買えないよ」と話しかける、
「どうか……さつき數へたら七十八人しか居ないぞ」と小父さん相變らずニコリして乍ら答へる。

「駄目だい、今にね開へ一杯這入るんだよ」

「それでも百五十人にはならないだらう。急行券は百五十枚賣る。」

「うん、その位になるよ、兎に角小父さんは危いよ」

「小父さん前の方に取つてゐるんだよ買はないか」と大きい方が言ふ、
「いくらだい」

「……五十圓だ」

「高いよ、それぢや赤羽が大宮で乗つて三倍拂つた方が得だ」

「小父さんそう言ふももちやないよ、此處から乗つて御覽よ、第一坐れるぜ、それに絶対安心だ、五十圓は安いよ」とチビ少年なかく、商賣上手だ。

「駄目、小父さんは此處で頑張るよ」と言はれて大きい方はふいと立去る、少年はこの小父さんにて心引かれて去り難い様である。

小父さんを見上げてニコリ、小父さんもニコリと返す、
「小父さん、何處へ行くの」

「札幌まで歸るんだよ」チビ天井を見ながら考へ込んでしまふ、
「家は無いのかい」

「うん、深川で焼けて一人ばつちになつちやつたの、それで此處へ来たんだよ」

だよ」

「そうかそれは可愛想だな、毎日どうやつて暮してゐるんだい」
「急行券買つたり新聞賣つたりしてゐるんだよ急行券一枚で百圓になるんだよ」

「へー」
「此處へ並んで買ふだらう、それを元にしては急行券の欲しい人と切符の欲しい人を探すんだよ、急行券が五十圓、切符が三四十圓もらへるね、それから席をとつておいてやるんだよ、それで二十圓、全部で百圓位になるよ」

「ふーん、そんなに儲けるなら残るだらう」

「うん、残らないや、足りないや、食べちやふもん、外食券なんか一回に三つ四つペロリだ」

「だけど外食券は四枚二十五圓、これに辨當代三十五圓とみて六十五圓ぢやないか」小父さんは仲々細かい。

「駄目だよ辨當ばかりぢや榮養失調になつちやふよ、それに毎日百圓稼げるんぢやないもの、

何にも食へない日だつてあるんだよ」不思議にその邊をウロウロしてゐると違つてこの少年はおつとりとして品がある、言葉にも嫌味がない、家のあつた方がいゝかい、

「そりやそうさ、どんなに貧乏でも好きな家があつて暮せたら……こんな事をしてるで先の事を考へると嫌になるなとしみん」と家庭の愛を求めてゐる様だ、そして此のどんな生活から脱しようと思ふ力が彼の力では何とも出来ないのであらう……

「そうか、お父さんやお母さんが戀しいだらうな」

「小父さん止めてくれよ、そんな話……」

「おもしろい話でもしような、友達あるんかい」

「ないよ、知つてゐるのもさつき奴だだけだよ僕やつた事はないけどね皆相當なんだよ、お上りさんなんか夜寝てる間に荷物なんか持つていかれちやふんだよ、時計だつて革を切つて盗るんたよ皆カミソリの刃を持つてるよ。」

小父さんも氣を付けたいと危いよ、
「小父さんは大丈夫だよ」

「そうかい」と鼻であしらふ、
「小父さんの好い時計だね」と言ひ乍ら時計をのぞき込む、小父さんが見せてゐるとチビの左手はスル／＼と小父さんのポケットへ……

「小父さんもお上りさんだ僕の手を見なよ」と財布をつかみ出す、

「参つた親分がいるんかい」

「うん居るよ、だけど彼奴嫌だ威張つて許りゐる

僕は問題にしてないよ彼奴皆に悪いことさせてね

金を集めるんだ。」

「夜は寂しいだらう」

「この地下道も物騒だよ。それに街なんか歩いてゐるとお巡りにね棒でボカンとやられるよ、時計も大分廻つた、通りすがりの人もこのデブとチビのコンビを頼笑んで眺めて行く、やがてチビはお尻の塵を拂ひ乍ら立ち上つた、きつと急行券の買手を探さねばならないのであらふ、それでパンを求めて今日一日の命を續いで行かなければならぬのだ……」

「参つた親分がいるんかい」

「うん居るよ、だけど彼奴嫌だ威張つて許りゐる僕は問題にしてないよ彼奴皆に悪いことさせてね金を集めるんだ。」

「ふと眼がさめたら」

三年 寺内文江

何だかひどい物音がしたやうな氣がして、ふと眼がさめた。部屋の中は眞暗である。何となしにうす氣味が悪いので電氣をつけて見た。部屋が急に明るくなつた。家の人は皆眠つてゐる。衣紋掛けに掛けてある着物が人でも立つてゐる様に見える、急に何だか恐しくなつて来た。夜中に眼がさめた程いやなものはない。「早く眠らう」と思つて眼をつぶつた。だがなかく、なつかれない。又眼を開いても一度部屋を見廻した。しんとしてゐる。ふと時計が鳴つた。二時である。今夜は何故

こんなに夜が長いのだらう。夜中に眼がさめた事は全くなかつた私である。天井を走る鼠の音に胸がどきんとした。私は頭からすつぱりとふとんをかぶつて息をこらした。

過去

二部二年 大根田アキ

「過去」それは何と懐しいうらほいのある言葉であらう悲しかつた事うれしかつた事辛かつた事樂しかつた事それ等が流れる月日の下に段々隔遠して想出の霞の中にとけこんでしまつては懐かしいものとなつて浮んで來るのである。考へて見れば私達の過去の中には樂觀もあれば悲觀もあり恐怖もある、憎悪もあれば發奮もあるけれども時の流れはこれを一様の過去の中に包蔵してしまふのである。

私達の出來事は大部分日月の流れと共に忘れられるべく様に運命づけられてゐる、恩師との別れ舊友との別れなど別離の悲しみは何年たつても忘れられない。又あの東京の大空襲の様には叫喚啼帝都を灰塵にしたあの悲慘な想出も、決して忘れられない。いやそれどころかかへつて東京の復興となくいつまでも苦い経験となつて吾等に教訓を與へてくれる。

私は今二年前の追憶を辿る、其の頃、私達は國士防衛の一員として工場に通つてゐた。勝つ事を信じつゝ、働いて、働き抜いた、小さい手に豆を作り乍ら、大人の人間に負けず一生懸命だつた、昭和十九年も暮れ様とする、温かな冬の陽が縁側に差し込んでゐる静かな日、祖母は病の床に就いてゐた、長い間の苦勞が、あり／＼と見えるやつれた顔、やせ細つた手足、こんなになる迄いゝ家の爲に盡してくれた祖母に對して今迄どんな事をして上げたらうか、自分自身を責める心苦しきは何と云つたらよからう、自分にもわかない。

これから先、何年も生きられぬ祖母に今からでも何かして上げたい、けれども今は朝早くから夕方迄工場で働いてゐる自分である、私事にかまつては居られぬ國家の一大事である、私はせめて休みの日はと思つてたまの一日を祖母の側で暮した、學校の事、工場の事等いろいろお話しして上げてゐた。然しその祖母も私の出かけた後に永久の眠りについてしまつたのだ、あゝとう／＼亡くなられたのだ、私一人どうして臨終の御側に居られなかつたのかしら……

後五分祖母の死がおそかつたなら……でもそれはどうする事も出来ない、自分の運命であつたのだ。

いつまでもいぬ私の心も春になると共にいつ

しか消えさつてしまつた、そして祖母が亡くなつて今年で三年である、もう三年も経つのかなあと思つた。静かな日曜日の午後、何する事もなくぼんやり祖母の事を考へてゐた、いつしか無意識の中に下駄をはいて足の向くまゝに暫く歩つた、そして通り着いた所は祖母の墓前である、どうして此處へ来たのか自分にもわからなかつた松の梢をならして通る秋風はどこから飛んで来たのか一枚の木の葉が、音もなく私の前に落ちて来た。

「秋の一夜」

四年 小林ミツエ

空には寶石をちりばめた様な星が無数に輝いてゐる。月は永久の沈黙を守つて淋しく下界を照してゐる。

秋虫は、つゆしげき干草の蔭から、おはれな音を傳へる、見ると、その繁みの中にひととものコスモスが恰も秋のおはれを語つてゐるかの様に、物淋しくうなだれてゐた。しかもそのおはれな中に一種の貴い氣高さを宿してゐるのだ。もしや秋の女神の精ではないか、フト思はれて何となく、なつかしく夜の更くるのも忘れて、何時までも見いつてゐた。月の光が私の横顔を青白く照した……心も爽かに私はすっかり秋の氣分に酔つてしまつた。

秋空高く浮いた雲の影、何と言ふするとい百舌鳥の聲だ。草むらの虫の音もほそやかに、物悲しく泣いてゐる。こうして秋も次第に深く成つて行く。

く、ア、秋、私の大好きな秋、燈下親しむの秋……

私はかふ思ふ

専攻科 手塚シゲ

雨は降る淋しい悲しい運命の人の上に、それははたして幸福かしら……

嫁ぎし姉のあまりにも不幸な話をつい立聞きした私、女の一生なんて皆んな家をはなれる時決つてしまふのだわ、モオッバーサンの書いた女の一生の様に。

いつか小川のほとりでそれとなく言つた姉の言葉、「家にゐる時が一番いいわ」そうかしら……

心はいつも何もかもを一枚へだてて其の向ふに、友があり父がある、父にしひたげられて泣いて来た老母がある。女なんてこんなものだ。何んの發言もなく重石の下にちままつてゐる憐れな女性、特に農村の女性なんて「奴隷よりももつと」深酷なものがあるのだ。兄が言つた「農村は一世紀おくれであるから仕方がないよ。なる程さうだとつくづく考へた、母をしひたげて来た父も、良心に何かくひ込む所があると見え、毎日病床にてもがく聲、父の怒りつばい性質、でもこれからの私や弟達とは素直にと氣遣ひつゝ、教育してくれる優しい母、一人床の中で胸一杯になりつゝ、母の健康を願ふのであつた。姉も母さんと同じ様な運命なのかしら、家に來て一人泣く痛ましい姉の姿、矛盾の多い世の中。お茶を呑みながら語る世間話に久しぶりで笑ふ姉の顔、もう何時かしら「おら家の誓つた。

時計はゼネスト中なのホ、ホ、母も義姉も姉も一語に笑ふ「もうおやすみ」「はい」と先へ床に入つたが後で又母と姉の聲がヒソヒソと静かに聞えて来る。雨は又一しきり降つて来た一人床に静かに考へる。私も決つと姉ちゃん見たい運命だは私は何も知らないし、何の才能もない。だけどたゞ望みは私は呑氣な人間であると言ふ事だ。だから私は人から何んと言はれてもピンと強く感じない、私は人生の苦勞を知らずに平凡に暮らす事だらう、私は思ふ、この上何んの望みもない、たゞ姉の幸福を祈ると同時に、私の一生が平凡に生活出来ればそれでいいそれ丈でよいのである。

希望の首途

四年 石塚泰子

かぞへてみれば四年の月日は何時か流れ行き共々今日が別れかいささらば

皆んな楽しい思ひ出よ
海山遠くへだてても
互に忘るな面影を
深き師の恩胸に抱き
高き理想とあこがれを
榮ある今日のこの首途

生活日記の中より

二部一年 菊池正恵

何か頼らないでは生きてゐられない様な日が續く瞬間が連續して成り立つてゐる人生と聞か……夜、灯の下で花占ひをして見た、占ひをするなんて退屈な時か餘裕のある時にするのだが……私はずいぶん占ひでもしてみなければ、盛り上つた……と云つてもうはべ丈だが……感情が爆發し……うであつたから。

切迫した氣持が占ひに飛びついたので待ちは今日來られない事を悲しんでゐるさうだ現在は……貴女はあまり我儘し過ぎます、そして未來を飾る文字はたつた一つ凶!

陽ははずんだそして夏は我が天下と云はんばかりに油煙の聲。然し暑い夏の夕、カナ／＼と遠く日暮し蟬の聲。その聲のみ聞いた丈で田園の自然を思はせる、悩む、悩む！ホームシックに呼吸すると何かに威壓されるかの様に胸の痛む日が續く、窓邊によりかゝり一人静かに夜空を仰ぐ涙が頬を傳つて流れる、とかく女學生といふ者はセンチになり易い。

夜更けてから獨り床に涙を流す事を覺えた……蓄積された其の日々の虚性と想ひ出を現在及び未來と切り離してしまふ爲に……誰も知らない世界で泣き聲をかみしめて泣く事の

嬉しさを知つた、夜更けの床の涙に對して喜びを見出した併し此の事は誰にも教へてやらないつもりだ、此の歡びを誰にも氣づかれないでゐようと思つた。

燕

一年 相澤トヨ

去年の六月頃は太平洋を越えて來た燕が私の家にもおとすれて來ました、ところが此の燕はとても風変わりです、一生懸命土を運ぶのですが天井につらしてある籠の上に巣を作るのです、今にも風が吹いて來ると落ちてしまひさうな所なのです。母は可愛さうに思ひ、巣を安全な場所へうつしてやりました。ところが氣にいらぬのかそれつきり私の家に姿を見せませんでした。

それより一年は過ぎ、濠州、イードその他からぞく／＼と燕がやつて來ました、その中には私の家に來た燕もまじつてゐました。その燕達は家の前の電線にとまつてゐましたがやがて家の中を何度となく飛びまはつた末、去年巢を作つた籠の上へびたりととまりました。それから幾日かの間一生懸命土やわらくづなどを運び巢を作りました。

ところが或日恐ろしい事が起りました、それは強い風が吹きふいたとたん巢が籠の上から転落したのです。たゞそれだけならよいのですが、巢の中に入つてゐた卵が三個とも割れてしまつたの

です。私は可愛さうで可愛さうでたまりませんでした、母はまた去年巢を作つた所に板を打つてその上に巢をのせてやりました。だが親燕は子燕を失つた悲しさに何度も籠のまわりを飛びまはつてゐましたがあきらめたと見えて、母の作つた板の上にとまりました、それから二三日過ぎて又二個卵を生みました、孵化後母はちよつと巢の中をのぞきました所が變なのです、親燕は入つて居りません。幼い燕を置いてどこへともるのでせう。でも朝になるとまだ家で起きないのに親燕は餌をくはへてガラス戸のところでピーピーさえずつてゐます、戸を開けてやると嬉しうに子燕に餌をやるのです。一週間位過ぎてまたもやつばめにとつて恐ろしい事が起りました、それは子燕が早く外へ出たい一心に巢の中で羽ばたきをしたために板の上のつらした巢が動いてしまひました。だが子燕は恐れずに羽ばたきを何度もしました。そのため巢が落ちてしまひました。驚いた子燕は外へ飛び出しましたが思ふやうに飛べません。家の前の電線へともるまでに何度も落ちさうになりました。それからといふものは電線を巢のやうにして暮して居たやうですが、一羽どうしたものとこにも見當りませんでした。秋も近づいて來ました。燕も續々と南をさして飛んで行きます、その中にはきつとあの子燕たちもいる事です。祖母の話では「子燕たちは海を渡る時木の葉の上に乗つて渡るのだよ」との事です。

時計

二部二年 高橋セイ子

時計は地球の番人です、時が進んで行くのを時計はじつと監視してゐます。一秒間でも目を離さずに見つめてゐます。そして何處までも時の進むのを追つて行くのです。時計は休まずに非常な速力で進んでゐます、それでも折々休む時計もありますがそれは、人間がねちをかけるのを忘れたり呵嚙に取扱つてやらない爲にやむを得ず活動を停止してゐるのです。時計は私達人間の爲に時がどれだけ進んだかを精確に報告して呉れます、それで社會の秩序が保たれてゐるのです、時計は忠實な地球の番人です。

時計の音はまた神秘的なものです。夜中など一人で讀書してゐますと天地は静まりかへつて大の泣き聲も子供のさわぐ聲も聞えませんが、その時々ツクツクと床の間より聲を發するものは何でせう、それは云ふまでもなく時計です、この音は一面に於いて私達の生命をささむ響の響とも聞えます、さうです、時計が一度カチと響いたら、それだけ私達の生命は、墓場に近づいてゐるのです、だからその音がひまを惜しむべきことを云つてゐるやうに思はれるのです。

秋暮れて夕日に映える一軒家 一年 大淵 利子
冬の月一人さびしい村の道 一年 青木 英佐
木枯や麥踏む人のほろりかむり 專政科 小野 文子
夏の宵すだれ通しの美しさ 二部二年 志津子
除夜の鐘停電のまゝなりけり 二部二年 吉田 静子
青い田の中を通るや音の笠 二年 中村ミドリ
すいときて浴衣にとまる蜻蛉かな 四年 清水ミドリ
焼跡の庭いつばいに夢を干す 四年 阿久津節子

冬 の 道

專政科 渡邊 和子

私は友と二人夕焼の道を歩いてゐる。始めて来た町はずれの道だつた。淡い陽は枯れ果てた夏草に、鈍い光をなげ、骨の様な裸の枯木は、音もなく、冬の陽に包まれ立つてゐる。幾葉かあちまん葉は、他しい梢に、とどまり、夏の日の名残をとめてゐる。道の片側の崖の奥に、賤家が木の間にぐれに見えるうちに、蒼茫たる暮色がおもむろに、たちこめ始め、遠近に見える山家も疎林も、夕陽に照らされ、夕間にとざされて行かうとしてゐる。南にははる流雲の切間に太陽は没し様と西に傾き、影も明のみの世界を黒く作つてゐる。自然も人生も刻一刻と暮れて行く。個々の想にふけり、冬の畦道を行く。友は頭を垂れ、黙々と歩いてゐる。暮れゆく冬の寂寥に、さそはれてか、友は沈んでゐる。鈍い日に照らされた友の後姿を見た時、人間の眞の寂しさやと云ふものに、ふれた様な、哀憐の情を覺えた。そして此の淋しさの解決を求め、誰と盡きぬ旅に、さすらう人の切なき心情は、こうではないかと忍ばれた。カサカサ、落葉を踏みしめる靴音は、自然のリズムになつて耳に入り、ひとり四方の静寂を破るぬかるみに出た。行く手を沮まれ歩調は亂れた。短い日足は、私の影を長くつくつてゐる。

私が動く。影も動く。又私が一歩動く。影も一歩進む。一歩／＼同じ様に。再びも

無 題

二部二年 岡田美佐子

由美はじつと男休山をにらんだ。由美は唯、誰でもよいからにらんで居たかつた。そうしないと心に有る物が、どつと眼にあふれて来そうだからだ。男休山の頂上には、薄黒い雲がおほつていたが、あたりは明るかつた。日が當らない木にもたれて現在の自分を思つた。

由美の女學校は、こゝからあまり遠くない町にあつた。由美は戰災の爲に父母を失ひ、父の弟に世話になつてゐる身であつた。だが今から考へると親切に同情して呉れた。だが今から考へると好寄心の爲だつたのかも知れない。今は皆に相手にされずにいるのだ。其の譯は、由美はい、聲で前の學校にいた時、音楽の先生が由美さんはい、聲です。ね。一生けんめいに勉強したら聲樂家になれるかも知れないわ。と云はれた程であつた。入學して始めての音楽の時間、先生は「お入りになつた方ですね、では何か歌つて頂きましょう。由美は少し顔を赤めながら「サンタルチア」を歌つた。由美の歌聲は、先生を驚かした。「まあ何んとよいお聲でしょうとお賞めになりました。學校でも評判になつて、由美が歩いてゐると「ほらあの入だよ、歌が上手だつて云ふの」。「そを、色が白いのねえ」等と云ふ囁きが聞えましたが、おとなしい由美は、自惚もしなかつた。すると組にSと云ふ勢力を張つていた人が「何よあんなの外國人の眞ねなどして大層らしく、ふん」と言ふとつる

の幸福、永久の安息所として求めて生命を斷つた。人間の情みに同感を抱く。結局人間は墮落して、純粹な罪のない動物にならなければ生は樂しめないのだ。而し人間は不幸にして動物以上であるか以下であるから仕方ない。しかも、人の世の矛盾を感じ空虛を悟る。そして人間とは何をなすべきかの疑問さへ湧く。……此の様にして理性に終始すれば、當然自分自身の存在さへ否定せねばならない。此の思想を超越したならば、生もたのしく人生も快樂なりの心境も味へるであらう。トレストイも人生の美は笑ひにありと言つてゐる。生死に不信を抱き、濼濼げば濼濼と、疑問は、ますます深くなり、生きてゐる内に此の不可解の謎を解くには、信仰に歸依し、哲學の眞理を計り知らなくてはならぬ。

どら過去の足跡は、將來の足跡を追つて行く。人生の運命の暗示の如く。時は、たゆみなき跡を残し、時は凡ての問題を静かに解決して流れてゆく。何處ともなく。一きは高き、ときの聲を上げ、競うて走りゆく童等、その姿の如何に孤獨なる事よ。童等は深く深く感傷をそまつた。紫の迫り来る暮色の中に旅人が行く、冷たさも、暗さでも、まるで知らない様に、歩一歩静かな足どりで。何と云ふ静かな孤獨であらう。悲愴な孤獨であらう。尊い程に、祝福された唯一つの孤獨に、人生至上の恍惚境。私は幾度か振りかへつて彼を見た。影ばかりが後を引く。

たそがれに我が家の灯窓に映つりし時
我が子歸る日祈る……
感情のまゝに唄つた。唄つたがすぐやめてしまつた。黙念として居る友に壓倒される様なショックを感じたからである。私は友を再びみた。友は寂しい目を夢島に注いでゐる。何かしら云ひたかつたが、友の沈黙を破るのがこぼかつた。細い小さな生命は霜柱の冷たい床の中で、やがて息を止める春の光を信じ息ついてゐる。冷たい空氣が凍ひ始め身にしみる。何かしら云つてみた。而し反つて、此の心が表はせたらば、此の心が壊れてしまひさうだ。何故ならば黙つてゐる事のみが友を慰むるに至當たと思はれたからだ。寂しい友の宿命的な身の上がそとに浮んで来た。

「暗黒の死に向ふ人生の幸福があるでせうか」友の苦しい言葉が耳に入る……
私は考へさせられた……
刻々と向ふ滅亡の日を意識してゐる人間の、幸と不幸及び快と不快の感に常に越る。私だつてそうなのだ。今の私は幸福でない而し不幸だとも云へない。中立的幸福、中間的不幸と形容してみたい。幸福に苦痛が伴ひ、平和に倦怠が伴ふとすれば、おまゝ私ば、やすらふかと肯定した。眞の幸福とは死より先への人生、永久の人生にありて現實的には存しないや云ふ。生きてゐる内に斷片的に幸福に享樂してゐる若人、一時的の幸福をたのしんでゐる面影が浮び、訪れる幻滅を想像した。では永遠の幸福とは何でせう……
或る哲學者は曰く「死」と一体あの世の存在があるのでせうか？……私は不信を抱いてゐる。フロウベルは、あれば一層苦しい世界だと云つてゐるが。
現實は生きてゐる自己の存在を悲しめば、より暗き、宿命的な運命論者となり、悲觀論者となるだらう。運命は開拓の可能性ありと云はれてゐるが、現實の憂が深くなれば、苦惱は増々深くなり、生きてゐる事の苦痛を感じ、その日／＼の生をたのしんでゐる無能な人間を、輕蔑したい優越感と羨望の心さへはし起る。が常に現實は苦惱の形相を呈してゐると云へる、意識の出來ない世界のため想ひを苦しめられて厭世主義者にもなつてみる。そして死を絶対

雑

感

灰野潤

煙草

白いゲートルを被った、お伽の國の使者
被れ切つた体を薄白い煙を吐いた汽車に
乗せて
夢の國に運んでくれる
黒
暗黒の中に何者かがひしめきあつてある
金が欲しい、金だ、金が欲しいと云ひな
がら

白

白はきれいな色である、きれいなが故
に汚れやすい

時計

一毛のネヂは一厘の価値もないかもしれ
ない
精巧な極めた時計は時に千金の價を持つ
てあるかもしれない、しかし一厘の価値も
ないネヂ一つなければ千金に價する時計も
何んの價値も見出せない。
一毛のネヂ、一片の齒車、一つのセンマ
イがそれぞれ自分の職能を果してこそ、千
金の時計は千金の價値を生れてくる。
人は十人十色、それぞれ違つてはいるが
世の中と云ふ時計を作つてゐるのは人であ
る、人もネヂや、齒車やセンマイの様に自
分のすべき仕事があるはずであつて、人た
る以上優劣の差をつけられる理由はない、

ひたくなつた。と云つて私ばかりで私であ
り、宇宙に蓋く、微生虫の様な私の惱は、
私自身語り、誰が解決を與へてくれるでせ
うか、こゝで考へました。
何の爲の生でせう、
私は苦惱のための生と云ひたい。

故郷

四年 阿久津セツ子

何の爲の苦惱でせう、
解決の爲の苦惱です。
何の爲の解決でせう、
幸福のための解決です。
何の爲の自由でせう、
自由のための解決です。
何の爲の自由でせう、
幸福のための自由です。
何の爲の幸福でせう、
死のための幸福です。
何の爲の死でせう……

これ以上生きて居る私には分らない。死
は絶對の矛盾、絶對の幸福、宇宙の真理は
果してどちらなのでせうか……紫の彼方
は疎らな松が黒く目に映る。夕げの仕度
にいで映る。夕陽は沈んだが金色の光は杜の
彼方に燃えてゐる。自然の美、一幅の神秘
な繪畫何と美しい何と晴やかな生の解答
でせう。靜かに死を見つめ、人の世の苦し
みを苦しみ、感謝して生きる事が私の生き
べき道だつたのです。努力する事が人の世
で一番美しいと自然は、教へてくれました
深く、想ひ及ぶ感謝したでせう。
四方には闇が深うた。城に歸るか、群雀
の影も倦しく、一聲高く鳴きながら消えて
ゆく、私は視界を凝視した。母の面影がチ

ラと目をかすめる。煙の様に。まげはしま
せん。どんなに寂しくても哀しくても。自
然は新たな希望を與へてくれた。そしてこの
希望の失はれん事を神に祈りながら闇の道
を友といそいだ。

或日の午後

二年 野崎タツ子

六疊に花活ける姉と二人あり
桔梗さびしき秋の夕ぐれ
日記をつけ乍らふつとみんな歌が浮ぶ、
「桔梗さびしき秋の夕ぐれ」併し今はミン
ミンの鳴く聲のみかましい、ヒツツリ
とした真夏の晝さがりである、相變らず氣
の利かない私は桔梗と書くとどうしても下
の句は秋の夕ぐれでなければおさまりがつ
かぬ。

「茶の湯とは帯を小さくしたもので茶碗
をがりが振き廻してつくつた緑色のあ
まう。降りしきる雨に思ひも種々様々なセ
ンチなものに、おさへられる。
昨日も今日も、あの雑踏せる町を歩いて
ゐた、幾千人の人々は、今、何をやつてゐ
るだらうか、同じ様に、靜かに屋根を打つ
雨の音を聞いてやばり感傷的な思ひに、恥
づかあるだらうか……否、それとも靜かな
雨の夜を、享樂に、いそいでゐるだらう
か……」
現實なんて慘酷で不公平なものであるの
が、自分自分の氣持に對象して様々と思ひ
を、又こゝに呼び起す。
どれ程、夜の雨は、不思議な魔力をもつ
てゐる事だらうか、それによつて人間の氣
持も、どれだけ變化するか。こんな本の一
節を、讀んだ事がある。

雨の夜

専攻科 佐藤昌子

止めどなき涙の如く靜かに屋根を打つ夜
の雨……遠くひびく汽笛の音も雨にけぶり
て一しを哀愁をさへり餘韻を残す……何ん
とも言へぬ悲しさ、寂しさを身にしみて覺
た思ひなのであらうか……
何時迄も一人で居たい、何かしら思ふ存
分感傷的な氣分に侵らた極端な極めて自制
のない衝動にかられ、辛うじて支へようと
する氣力すら失つてしまふ。過ぎし日の思
ひ出に、限りなき愛着を感じつゝ感情の動
くまに懐かしさ或は悲しさを感ぜ、又その
まの氣持を愛讀した小説のヒロイン公に
追いつく心な引かれる、復活のカチカチヤ又
ば、たたくらへの、信如等、何かしら自分
自身がその立場になつた様な、香、成り切
つてしまつたかの如く深い思ひに侵つてし

風

三年 加藤富美子

ふと夜中に夢がさめた。家中はしんと靜
まり、時計が十一時を知らせてゐた。ただ
耳に入るのは木枯の音のみである、庭の裸
木のかなしく、すれ合ふ音が風の音にまじ
つて、ひゆう／＼と聞えて来る。風はたえ

ぶくを押載いて飲むものである」
といふ様な意味の文句があつたので私が
手をたいて「随分思ひ切つた事を書くの
ね」中でも緑色のあまうは氣に入つたわ、
と云つた時と同じ様な表情を姉はなざるか
も知れない、桑原々々、もう黄色は深山
だけであの時私が
「お姉さんのお茶を點てる姿は緋よ、お釜
の前で柄杓をかまへたとこはどうしても
そのお淑妙にも振ふ緋の色だわ」
と云つたら妙な顔をしてあなごつたつて
本當に靜かな午後だ、時折の微風がす
かな涙をいざなふ。サラ／＼とペンを走ら
せてゐる音に自らのしみつゝ今日の書き
ものは終へた。青もの、多い庭に眞赤な百
日草の大輪が目にしみる。時ならぬ鶏のと
きの聲に驚いて目をはずす。

木鉄のパン／＼といふ浮いた音が何時
の間にか靜になつたと思つたらどうやら姉
の花活も終つたらしい、お花から少し離れ
て膝にキチンと手を置き活け上つたお花を
じつと見つめてゐる。いや見とれてゐるの
かも知れない姉。は活け上つてからお花に
向つて十分でも二十分でも見入つてゐるこ
とがよくある。そんな時私は姉の表情に何
ともいへないなごやかなものを見つめる
ことがある。すまじと桔梗がキツチリと根
本美しく筒に入つたところを正しく矯正で
ある。
私はむらさき、むらさき、と小聲で呟き
つゝそつと室を出た。
x x x

ず雨戸をうつつ。犬の遠吠えが風に乘つてか
すかに流れて来る。私は「ふと」こんな小
説を思ひ出してゐた。それは、冷たい強い
風の吹いてゐた夜だ。月は下界を突む／＼
と照らしてゐる。地上を、大きな影が急い
で行く。馬車はある牢獄の前にとつた。囚
人が一人連れて行かれるのだ。月の光は牢
獄の格子を通して壁の邊迄冷かに照らして
ゐる。彼は決別のために其壁の上に何か二
三行彫り刻んだ。彼が書いたのは言葉でな
く此處で過した最後の夜に心から進み出た
一つの旋律だつた。そして戸は開かれ彼は
連れ出された。外は木枯の吹きすさぶ寒い
／＼夜だつた。一陣の強い風が吹きすさぶ寒
い人の体は小さきみかへへてゐる。圓い月
は遙かの天空から彼を憐むかの様に見下
してゐた。……
やがて囚人は馬車に乗つた。馬車は嚴重
な格子で圍まれてゐた。鞭は鳴つた。馬は
急速力で疾の方へと走り去つた。後には冷
たい風が「ひゆう」と悲しい叫聲をあげ乍
ら吹きすさびて行つた。
月は又牢獄の格子の中を覗いてゐる。月
光は彼の最後の言葉であるあの壁に刻ま
れた旋律の上にその光を投げかけてゐた。
言葉の力が盡きる處に、音律がものを言ふ
のだ。しかし、二三の音譜のみを、照らす
ことが出来た。彼が書いたのは、死の讃歌
であつたのか。それとも喜の歌であつた
のか。彼は死に、行つたの。愛人に抱擁さ
れに行つたのか。月の光は人間が書くべき
ものさへ、總べてを讀むことは出来ない。
際間洩る月がまなき夜の牢獄を突々と吹き
まくつてゐた。私は、ふと我にかえつた。
外はまた木枯が木々の梢を鳴らしてゐた。

日本の心

手塚武

ばん坊主の袖を鳴らして、
北風の吹えたる日曜日午さがり
南向きの土手かげに、語らう人もなくただ一人、冬陽の中うづくまる白衣の人。

書物を、ざに、見るともなく、バラバラとめくつては、ものを思ふ。
その人のひたひ越しに、
晴れたり、曇つたり、くわうくわうと光りくまめく北の山並みがかげつてゐる。

ああ、南から、北から、大陸から、かへつてきたおびたしい人の大群に、
押し返され、ひしめき、さし込みながら、
傷つき、病み、つかれて、かへつてきたあなた、
君たちに何の力があろう、
君たちに何の責があろう、
君たちに何の責があろう。

その背後のもの、
その黒い手が、
君たちから腕を奪ひ、足をへし折り、両眼を奪つていつたのだ。

あなたの眼はじづかに考へ、
あなたの口は何事も叫ばない。
あなたは黙々と轉身をもくろんでゐる。
あなたは自力で生き抜かうとなさつてゐる。
あなたのひざの書物には、
もうこのごろ、どこの本屋の書棚にもあまり見かけなくなつた「隻手に生きる」の文字がチラとのぞかれる。

北風をさけて南の土手かげに、
だまつてうづくまる「日本の心」を私は見た。

みほとけに捧げまつりし白百合の花は静かに匂ひ咲くなり
ほとほとと降る雪見つゝ圍裡裡はた友と語りて樂し一日
待ちわひし友は來たらずいたつきの急より遠き夕陽をみる
かすみつゝなびきて遠き山々を見しときせちに故郷の偲はゆ

二年 鈴木ミヤ
二年 大塚 智子
四年 塚田 綾子
専攻科 山本トシ子

新憲法の基本原則

須賀 淳

新憲法の最も顯著な特徴は、第一に我が國家機構から封建的強制的な殘滓を取去つて人權の尊重を基とした國會、内閣、司法制度その他を規定した事であり、第二は諸國民の公正と信義とを信頼して世界嗜矢の戦争の放棄を規定した事である。そこで、その新憲法の基本原則の中「主権」「基本的人權」及び「文化國家」の三つを取上げて、極めて概説的ではあるがその特色を明治憲法のそれと對比しつゝ述べて見たいと思ふ。

一、主権 新憲法ではその前文及び第一條で明らかになやうに國民主權主義を採つてゐる。これが明治憲法との差異の第一である。而して金森國務相は議會に於て「明治憲法でもやはり國民主權主義であつたが、只それを國民が意識しなかつたに過ぎない。従つてかの天動説、地動説の場合と同じく、實體の變化ではなく認識の變化である」と云ひ、又植原國務相も、「元來國家といふものは國民主權であり、主權在君、主權在民の問題は最初からあり得ない」と述べて、共に國體は變化しないとの説を固執した。然しながら實際には、明治憲法は神勅主權主義であり、國民主權ではなく、此の點に新舊憲法の根本的差異が存するのである。であるから明治憲法の第七十三條の規定によつて、全然別個の根本的差異のある國民主權主義の憲法を作り出すことは法的には絶対に許されぬわけである。唯許される根本理由は「日本の政治形態は日本國民の自由に表示せる意志に基く」といふボツタム宣言の條項により日本が國民主權主義を採用したからである。法律的には許されぬことが現實的に行はれたのである。これは法律上からは革命と呼べるべきであらう。しかしこゝで云ふ革命とは社會上、經濟上の革命ではない「超憲法的改革」であり、本來憲法上では改革し得べからざることを現實的に憲法を超越して改革が行はれたことを意味する。神勅主義から國民主權になつたことは日本の政治から神々を追放したこと、即ち日本の政治から神を分離したことである。

二、基本的人權 人權とは人間が人間として本來から持つてゐる侵すことの出来ない永久の權利である。勿論明治憲法に於ても第二章で「臣民の權利義務」として人權を保證してゐるが、「臣民」といふ概念は國家の中に吸収されて、その自由は國家から與へられた自由、即ち Freiheit im Staat (Freedom in state 國家の中に於ける自由) である。従つて國家の爲に臣民の自由はその犠牲となる場合が多かつた。しかしながら新憲法では、第十一條に「國民はすべて基本的人權の享有を妨げられない」とあるやうに非常に異つてゐるのである。この基本的といふ言葉ではあらはされてゐる意味は、人間が人間として國家から獨立に、或は國家以前に持つてゐたものであり、國家がこれを侵害することには、自ら限界がある。従つてこれは Freiheit im Staat (Freiheit vom Staat Freedom from state 國家からの自由) である。即ち所謂天赋人權説である。更に内容に於ても新憲法は明治憲法より遙かに人權の保證が擴大強化されてゐる。明治憲法の人權保證は随分歪められてゐたことを認めねば新憲法の自由をはつきり諒解することは出来ない。新憲法で人權の自由があまりに高唱せられ且つ叮嚀に規定されてゐる事は決して誇りとするべきではない。それは今迄あまり認められてゐなかつたといふことを示すもので、むしろ恥とすべきである。

三、文化國家 こゝで云ふ文化國家とは狭い意味の文化國家ではない。文化國家 (Kultur Staat) といふ言葉は ユーロポ (Polizei Staat (警察國家、專制政治) Recht Staat (法治國、夜警國家、自由放任國家) に對してよく使はれた言葉である。自由放任では弱肉強食となるから弱い労働者を救はんが爲にある程度個人自由を制限し、そして個人自由を實質的にするといふのがこの意味の文化國家である。明治憲法では必ずしも自由放任主義を採つたわけではないが、文化的政策はなかつた。であるから明治憲法はあくまで十九世紀の産物であり、新憲法は二十世紀的である。第二十五條の生存權、第二十六條の被教育權、第二十七條の労働權等、これらはプログラム規定で國家が自身の使命を明かにしたものである。

夜醒む

専攻科 西宮 富美子

生きる事が嬉しいと云ふ事は眞實である、然して生きる事が苦しいといふことも又眞實である。.....

宇宙は廣大無邊であるけれども私達自身の世界と云ふものが果してどれ程の廣がりを持つてゐるでありませうか、世界は永劫の闇に包まれてゐるのかも知れない、唯私達が友を見出すことに依つてやみの中に幾くつかの星がまた々々始める。

昨年の六月、七月、八月月上旬頃の私達は殆んど生命の保證さへ與へられてゐなかつた、往來を歩るいてゐても何時も私達は死に直面した一瞬一刻を過してゐた。あのやうな數ヶ月の間に私達の隣人に對する心持はずつと横に淨化されたやうに思はれる。お互の家と家との間に横たへられてゐた塀も垣根も取除かれた、いや團といふ團は全部拂はれ、境とてない同じ空の下に共同の生活を營み

必要以上を所有する事の愚さを知つた。

「今日は今日で足れり」の生活の心易さを知つた。生命の不安があればある程一日生きる事のいかに尊いかなを知る事が出来た。

そこには當める者もなく、貧しき人もなく、皆なが同じ時、同じ町に苦しみつゝある仲間だと云ふ感じのうちに生きてゐたのである。

平和はあの恐しかった日を忘れさせようとしてゐる。私達は自分の心を責めなければならぬ、生きてゐるから苦しめなければならぬ事は當然である。

「私達は生きなければならぬ、静かにしかし強くそして苦しめ！」

私は自分の心にかう叫ぶ、ともすれば崩れがちな自分の心を叱つて、生きることが嬉しいと云ふことは眞實である。然して.....生きる事が苦しいといふ事は、更に眞實である。

私は團扇である

三年 浅田 美恵子

夏目漱石集の中で有名な吾輩は猫であるをちよつとまねて書いたものである。

夏が来た。夏が来た。障子がはずされ、その後には青い簾をかけ縁側には、ふりしが下り町を歩く人の氣持もどことなくたのしさを感ずる。急に私の体は左右にゆれた。今までは高い欄の上に座ると一階に一年の間、生活して来たのだ。ふと耳もとで、「あつたり、こんな所にすい分す、けてゐる」と言ふ聲がする「買つて来ませ

目がしらが熱くなつて来た。骨のおれた所が痛い。外に誰かの笑聲が聞える。「アツハハハ坊やにはうつかかりしていられない」「ほんとうに手をはなしてしまつたもんですから」と主人と奥さんの話である奥さんは自分の寝ていた事をかくしてゐる。「あつ敷がある。團扇を」「ハイ」「買つて来たのか。の前の、もうすすけていたからなれ。もう私の後輩が来て来たのだ。その後輩に幸あれと祈つた。あゝ私はいむくなつて来た、体もだるい。口をきくのもいやになつて来た.....」

理想と現實

専攻科 中里 洋子

私は人間です。そして人間としての誇を持つて居ります、人間の誇とは理想を持つてゐると云ふことです。理想があるから理想があるのです。

人間は悩みがあります、悩みがなかつたら人間ではありませぬ。悩みは理想と現實との矛盾の衝突です。

私は生きてゐます。生きるといふことは自然と交渉を持つと云ふことです。私達は自然と無交渉では生きられません、即ち自然に順應することは現實です。そして私達は自然の一部です、しかし自然の一部でありながらしかも自然に支配され順應し自然を征服するところに人間の價値があるのです。だから理想を追求しながら、その道筋で現實との矛盾を克服しつゝ生きて行くのが人生なのです。

もつと氣短かに言へば人間はその日その時を理想を追ふことに費やしてゐるのです。今日の現實を明日はどれだけ高めようかと云ふ事に苦心してゐるのです、理想は人類の誰もが追つてゐるのです。それは現實にあきたらないからです、現實はこの一時です。

しかし私の目の前の理想を追ひかけてそれが達成されれば更に、その次にもつと一段高い理想が描かれます。つまり理想には解決がないのです、一段一段と理想を追ひながら精進するのが本當の人生なのです。

静かな雨

専攻科 鈴木 マサ

雨の音よ、夜は静かである、私ばたゞお前の聲音をのみ聴く、

第一のお前の聲音、そして第二の聲音、二つの聲音の間に幾人の人が生れ、幾人の人が死ぬであらう、二つの聲音の間に私は友を思ふ、

友よ、山陰道の友よ、雨は故郷にも降る、私達の魂が、はなれぬ山の山を越えて雨の中に眠るわびしさが思はれる。

雨が降る、雨は魂の愛撫、雨は魂のすゝり泣き、雨よ鼻は鼻に眼を閉めてあらん。

私の魂は鼻のごとく暗の中に、かつてありし日の嬉を見、かつてありし日の悲しみを見つゝ夜もすがら眼を閉めてゐる。

夜の雨よもつと静かに降つてくれ、そして、ありし日の嬉を悲しみを忘れないため.....。明日も又人生の憂鬱が私を待つてゐる。

四

やつと意識をとりもどすと、みなれない薄暗い所である。いやなにほひ、だん／＼目が暗やみになれた。これはゴミ箱だ。私はとう／＼ゴミ箱に、すてられたのだ。

「まあ團扇もこんな骨をおつてしまひ、金魚鉢もつてしまひお父さんにしかられるわよ、ほんとうにどうしよう。」

「お父さん、あたふたとおきて来た。二人でもんくを言ひ乍らかたづけ始めた。私は頭がへんになつて来た気が遠くなつて来たのだ.....」

つまり現実を次の理想へ實現するために全我を傾倒すること、それ自体が人生なのです、哲學上の理想や現實は私達女學生には消化しきれません。理論上の問題は更に形而上學の研究に俟たねばなりません。要するに人間はいつも理想を持たねばなりません、いや理想は必ず持つてゐるのですからその理想を現實化するために努力せねばなりません。つまり理想を現實化するための努力精進こそそれが人生そのものなのです。

俗言に『百里の道を行くものは九十九里をもつて半とすべし』とありますがこれは眞理です、百里の理想を持つ者は九十九里の現實を以て半とする勇氣がなければなりません。理想は無限です、現實は刹那です、しかし理想を追求する刹那の集積は理想のゴールインをすぐ目前にのぞんでゐるのです、その間隙が人生の姿なのです。

『望は高く持て』とは昔からの格言です、古來の偉人は、皆高い理想を持つてゐました。そして高い理想を持つてゐた人は大抵偉大な足跡をのこしてゐます。

哲學上の理想と現實の交渉は知りませんが概念の上の理想と現實とはつまり速さの違ふ二人の駆足のやうなものです。理想はいつも一足先にゐます一足追付けば理想は更に一足先にゐます。一歩一歩現實が理想を追つてきてゐます。

それが人生の姿そのまゝなのです、又そこに人生の價值があるのです。私は再び申します理想と現實とは人生の二一面

である、現實があるから理想が生れるのだ。そして現實にあきたらず次の理想を追求して精進するところに人生があるのです。もつとつきつめれば現實を理想に接近させようとする道程が人生そのものなのです、生きる價値なのです。

雨はれて

二年 甫坂 信子

昨夜の雨で 大丈夫かしら
急いで 畑にゆくと
アラ！ かわいそうに
みんな倒れて……

手を指しよるべると
ツムとくる
とても 新鮮な
「トマト」の香り
そつと起すと
葉蔭の露が
ホロりと
光つて落ちた

勉強

二年 甫坂 信子

この間第一高女の「學報」を讀んだ。その紙の第二面の右の隅に「不感症」と書いてあつた。私は二度讀みかへした。「記念館の階段は何段ですか」とあつた。第一高女の

友

専攻科 原田 雪枝

昨日迄降り続いた雨も今朝はからりと止み秋晴れの好い空を見せて居ります。今日は楽しい足利見學です。普通なら修學旅行であらふに私達は不幸な事局に直面し旅行さへ出来ず、やつと足利の織物工場見學と云ふ仕末です。でも貴女達は見學さへ出来ず私共専攻科へ入つた爲に行けるのれ、世の無情なのに私達は泣かされてしまひます。後数ヶ月にして懐かしい母校を巣立つ時ですが、私達の在學當時の思ひ出深いものは、工場職員ではなかつたかしら……寒い日も、暑い日も、勝利を願ひつゝ小さい手に豆を作り乍らハンマー振つたあの日……天も私達の喜びと共に天候を恵んで下さつたのでありませう、殺人的な混雑電車、私の襟に小さい者は呼吸さへ困難でした、窓より見渡せば黄金色の稲田は重さうに首をたれ鳥もさへずり何とも云へぬ風景でした、左に見渡す連山の峯、白雲の中より浮び出る美しき富士の姿、思はず富士山の歌を口にし幼な心にかへつてしまひました、足工の先生の案内で松崎織物工場へ参りました、昔んな女工さん達で私より小さい方が澤山居りました主に洋服地でした、見る物／＼ほしい物ばかりです、大きな部屋の中より開けるのは機械の音ばかり、話さへする人なく眞剣さに感心致しました、此處は餘り見學する所もなく次の第二染色工場へ向つた。此所は絹サーヂや、ビロード、銘仙等が澤山積み重なり布の型付が殆ど中心にしてあります。社長の説明に依りますと來年は銘仙の銘の字も無くなつてしまひ絹物等は到底着る事が出来ないさうです、足利に於て一ヶ月に銘仙が五千反出来るさうですが、手に入る事は不可能だそうで、

雑物を大切になさる様にとの事です、貴女もぜひおふくみ置き下さいませ、工場前の丘の上にある立派な建物は月見ヶ丘高女です、活潑な服装にパレーをして楽しく遊んで居りました、公園に行き約一時間ばかりの休憩があり私達のグループは八人で皆明朗な人々ばかりです、高い丘の上には丸くなり眼下に見下す足利市の風景、大阪の様に煙突が数本立ち白煙がもう／＼と立ち登り、又眼前には渡良瀬川が静かにゆう／＼と流れ、一層秋を感じさせられます、彼方

草負ひてあせ道遠し虫の音も忙しや遠く日は落ちにけり
木枯にふきまわられてこつ／＼と鳴る裸木に心寄すかな
ふたあつの想ひ出ありて青葉なす丘をめぐれば悲しかりけり
風をよぐ小川の岸のアカシヤの樹蔭に遊ぶ山羊の子二つ
夕さりて宵待草のにはふ頃月蔭ふみて湖畔をあゆむ
毛糸あむこゝろもたのしをり／＼は赤らむ指を火にあぶりつゝ
冬の日には南の空にひく／＼して雪の山原すでにかげりつ
ほのほのとあけはなれ来る野に山に平和の光さしそめにけり
大空の下に輝くテニス場に我はかけよりにラケットをとる
夕ぐれに向ふの山の頂きの雲はあかねして輝きにけり
父ひけば子等は押すなりリヤカーの秋の大根は白かりしかな
うすぐらき光の下に針を運ぶ母の姿のなつかしきかな
新月の出でて我が家はさだかなり笹すれ寒く夜風戸を打つ
雨もよひ歸りを急ぐ子をつれて配給を待つ列にだゞづむ
父母の野良着は汗によごれて洗へど残る野草の香り

四年 小川 カヨ
三年 砂川 孝子
二年 年 菊地 正恵
二年 年 志津子
一年 箕輪 ヒサ
二年 年 土屋 マサ
二年 年 増山 サク
四年 年 金枝 ヨウ子
三年 年 深田 和子
二年 年 加賀 昌枝
一年 年 松本 啓子
二年 年 吉田 静子
二年 年 鈴木 アイ
専攻科 小倉 ティ子

記念館にはたつた、一度しか入つた事はない、その時も他校の室内の美しさに目をひかれて、むしる階段には氣がつかなくつた。私は去年の春現在の學校（元四十部隊の兵營）に感して來た時雨戸もない窓から櫻の花びらが三四枚こみだらげの階段に落ちてゐた、私はその時何となく感傷的な氣持がした。何んか氣もなく階段を上ぼつて見た、二階では上級生が掃除をして居た。この兵營が私達の學舎になるのかと思ひながらさつき上つた階段を一段／＼下りた。そんな事は何んでもない。だが今でも自分の頭にはそれがはつきりと浮かんて來る、私達の學校の二階の階段は、全部で二十三段ある、ふとした所に計量觀念を發揮すればよいのだ。だがその時でその後は何もかもまはらない。それが人間のいや生あるもの、共通の弱點であらう。「勉強（一）私に現在の學舎を永久に去りたくない、しかし「光陰矢の如し」早晩後二回目の新春をむかへた。「今迄はどう言ふ教育を受けたか」と問はれたら私は答えられまい。封建主義の遺物を着せられて居た我々日本人が民主主義の道を踏まふとするには立派なそして合理的な指導者が必要だと思ふ、日曜の朝小高き丘にのぼつて、町の教育から流れて來る讚美歌を聞きながら清澄な空氣を吸ふ時の氣持、又學校で勉強する時の氣持を研究するのいつの勉強だらう。「それらを見ては何も思はぬ不感症のおそろしさ」。第一高女の學報はよく云つたものだ。私は感心した。私達の學校もそれに負けない様に美しい本を出したいと思ふ。筆をとつて机に向ふ。それが勉強であらうか。學校の歸り歩き方の練習をする又映画を見て友達と語り合ふ、これらも校外の自由研究だと思ふ、私は友達に別れて電車にのつた。電車につめられた私は、自分の横に居た専門學校の先生らしい人の話を傾けた。「さかん／＼にアメリカ勉強の方法を」語つてゐた、私はだまて聞いて居た、その先生らしい人の相手はさつきと親友でもあらう。言葉の使ひ方によると……むづかしい言葉が大分あつた。私はそれを家に歸つてからさつき字引で引いて始めて知つた、これも一つの勉強であらう。

此方より笑ひ聲が涼風に乗つて流れ、美味しいお辨當を口にほらばり乍ら友と何かしら語り合ひつゝ晝餐のびとさきを送りました、最後に紡績工場に行き、汚物が次々と更生され地味な毛布オーバ地等が出て有り此の毛布に包まれて休みたいなあと思ひました、歸りは足が棒の様になつてしまひ貴女のお土産と思ひましたが何もなく悪しからずお許し下さいませ、好い参考になり嬉しく思ひました、待望の楽しい見學も無事に済み明日からの勉強に勵みます。色々拙なき事を書き並べ悪しからず

雪姫と菊子

三年 赤羽陽子

遠い南の或る國に美しいお姫様が居りました。お姫様の名前は小夜姫と云ひました。この小夜姫は紫色が大變好きで、朝多くの女中をつれて教會へ行く時にも此の服を着ました。頭からはすき通る紫の薄布を長く垂して歩くのでした。其の途中には姫のお姿を見やうと澤山の市民が待つてゐるのが常でした。その群集の中に、雪と菊の姉妹も混つてゐました。やがて小夜姫の行列が遙かに見えなくなつた頃、雪は菊の手を引きながら家へ急ぐのでした。「姉さん何で、素的な着物なんぞでせう指環も紫、おまけにあのビカ／＼する靴も紫なんぞ」と、菊は夢中になつて、しやべり續けていました。すると前の方の人々が何か見えてゐるのが目についた。それは國王の出した立札でした。

小夜姫の姉に當る姫があり、その姫を今探してゐる。もし探し出した者には、多分の禮を取らせる。その姫は、小夜姫と瓜二つで、右の耳下に小さいほくろがある、國王と書いてあつた。菊はチラリと姉の顔を見た。それは余りにも、小夜姫に似てゐるからである。

姉妹の家は貧しい家でした。薄暗い家の中にお父さんが寝てゐるのでした。おじいさんは何年も前から寝てゐるのでした。それから數日たつた或

は、決して菊子を可愛がつては、くれませんでした。淋しくなつて、絶へられない時には、「お姉さん」と呼んで、淋しさを、まきはしてゐるのが常の様になつてしまつた。或る日の事、お城の近くにある家へお使ひに行く途中、お城の窓から紫の着物を着た美しい二人の女が、ちやうど見えなかつた。「姉さん」と、思つた時は、澤山の女中が後へついで行くのが見えるばかりでした。菊は果然と立つてゐた。冷たい風が頬をなでて行つた。菊はふと我に返つた。其の目には、一杯の涙が溜つてゐた。「菊の馬鹿」姉さんは、あのきれいな小夜様が居るんだもの、私の事なんか忘れてしまつてゐるのに、だのに、私は、姉さんが、と云ふと、胸が一杯になつた。其のまゝ、後を見ずにかけて使の家へ行つた。其の家は親切な、やさしい夫婦の二人暮らしでした。菊が行く度、色々と珍らしいお菓子や、きれいな着物をくれたりして、可愛がつてくれるのでした。やがて菊はこの親切な夫婦の家に、養女として引き取られた。そして菊をほんとうの子の様に、可愛がつてくれた。それでも菊は満足しませんでした。毎日、城の近く迄行つて、熱心に窓を見つめては、しばらくは立ち止まつてゐるの、常の様になつてゐた。一方城にゐる雪姫は、或日の事、余りに淋しいので一人で長い廊下を渡りながら、ひよつと窓から、下を見ると、心にこちらを見てゐる一人の少女が目についた。その少女は、嬉しそうに手を振り出した。雪姫はもしやと思つて、熱心に見つめた。「たしかに、菊ちゃんだ」と、知つた雪姫は、夢中で手を振つた。振つてゐる内に目がかすんで、菊ちゃんの姿がほつとして、しまふのでした。其の翌日同じ時刻には、菊子はちやんと、立つてゐた。雪姫も手を振る、菊子も手

日の事、市長さんと、三人の役人が来た。そして「實はな、お前さんの家に、小夜姫様に似た少女が居ると聞いたものだからね」と云つた。おじいさんは黙つて雪を見た。雪の右の耳下には小さいほくろがあるのでした。市長や三人の役人は、それを見るに急いで歸つて行つた。その時隣に「おじいさん、急いで飛出して来て、「姉さんは、私の姉さんなのでせう」と泣きじやくりながら雪にだき附くのでした。「え、菊ちゃん、貴女は何時迄も、私の可愛い妹なのよ」と、雪も涙ぐむのでした。其の夜から、おぢいさんの病氣は、急に悪くなつて行きました。時計が十二時を打つと、今迄こん／＼と眠つてゐたおぢいさんは、急に目をさまして、雪と菊を呼んで云ふのでした。「二人ともこれからわしの云ふ事を良く聞くのですよ、昔或る處に二人のお姫様が一所にお生れになつたのだよ、その國王は、大變お喜びになつてその二人におそろいのダイヤの首飾を上げたのぢや、所がその姫が生れて間もなく、色々な出来事があつて、姉様がどこかへ行つてしまつたのぢや、その妹姫が小夜姫なのぢや。わしの枕元に四角な箱があるはづぢや、開けてごらん」と、おぢいさんは、まばたきもせず云つた。雪はふるへる手で、其の箱のふたを取つた。中にはダイヤの首飾が輝やいて居た。「何もかも分つたらう。雪様貴女様は、わしの孫ではないのぢや。わしは何邊名乗つて出ようと思つたか、しかし菊が「姉さん」と、慕つてゐるのを見ると、どうしても離したくなかつたのぢや、だかもう菊もあきらめてくれ、雪姫さんは此の國の國王のお姫様、小夜姫様の姉妹なのぢ

を振る。それが何よりも一番、幸福な時なのである。雨が降つても、風が吹いても、雪の日でも、必ず手を振つては合圖し合ふのでした。その頃から、雪姫は頭が重くて食事のものを通らず、美しい雪姫の顔は、青白くなるばかりでした。その日は雪の降つた寒い日でした。雪姫は、衰弱した身体を長い廊下の窓まで運んだ。その下には、可愛い菊ちゃん、此の寒空に唯一人待つてゐるの、と、雪姫は、急いで手を振つて、合圖をする。ばらばらすると、一人の優しいおぢいさんが、菊ちゃんを見つけて、急いで手を引いて行くのでした。急に、冷たい風が、雪姫の体を包んだと思つた瞬間、目まひがして、何が何んだか、解らなくなつてしまつた。後は人々のさわが聲のみが遙かに聞えていただけでした。どのくらゐいたつたのか、ふと目を開けると、ふか／＼するベットに、寝かされてゐるのでした。そこには小夜姫が心配に自分を見つめてゐるの、と、美しい顔を横にかしげ、聞くのでした。「小夜様、今は何時なの」と、雪姫は青白い顔で聞くと小夜姫は云ふのでした。「姉様は、昨日長廊下で、おたほれになつてゐらつしやるのを女中達がお見つけして、醫者を呼ぶやら、お父様がいらつしやるやら、私とでも、心配しましたわ、昨日から、今迄寝て、おたほれしやるんですもの」と云つた。そう、もう時刻だわ、可愛い、菊ちゃん待つてゐるのだわ……と、思つた雪姫は、ふら／＼する頭をたげた。「まあお姉様、お静かに寝て居ら、しやいませ。さつきお父様が、お見舞にいらつしやつた後で、醫者が「安静に」と、おつしやいましたの」と、云つた。しかし雪姫はもう夢中であつた。「ねえ小夜様可愛い、菊ちゃん」

や」と云つた。おぢいさんの目からは熱い涙が落ちてゐた。雪も菊も泣いた。泣きながら雪は云ふのでした。「おぢい様、菊ちゃん、私、城へは参りません。どんな立派な御殿だつて、菊ちゃんを別れてしまつたら楽しい事なんか無いわよ」と、菊ちゃんを、慰さめるのでした。次の朝方おぢいさんは、歸らぬ永久の人となつてしまつたのである。とう／＼雪は城へ行く事になつた。たつた一人になつてしまつた菊子は、市長さんの家へ引き取られる事になつた。いよく、車で城へ行く事になつた前夜の夜、雪と菊はいつまでも話し合ふのでした。「明日から、姉さんは、私の姉さんではなくなるのね、雪姫様になつてしまふのね」と、云ふ菊子の服に反して、雪の服は、小夜姫とおそろいの紫の着物を着、あのダイヤの首飾をしてゐるの、と、二人とも快活に話し合つてゐる様に見える。しかし二人の目からは、幾筋もの涙が流れてゐた。城へ行つた雪は、無事に國王や、小夜姫と對面をすました。國王は威嚴のある中にも親實の父の優しさを、持つてゐる方でした。小夜姫も「姉様」となつて来た。しかし豪華な建物も立派な着物も指環も、美味な食物も何も彼も、雪姫は、満足しませんでした。唯、菊ちゃんに會ひたいだけでした。しかし其れは徒勞に終りました。姫の身で貧しい女子と話し合ふ事は、國王が許さないからでした。

やんが、あの長廊下の窓の下で私を待つてゐるのよ。だからちよつとで良いから、あの窓の所まで私を連れて行つて」と小夜姫に頼むのでした。よめめ雪姫を、小夜姫や、多くの女中が左右で、さ／＼ながら長い廊下を、一歩／＼あへぎながら窓ぎわ迄よう／＼来た。雪姫は窓から半身を出して、手を振つた。菊ちゃんも手を振つた。しかし長くは續かなかつた。雪姫は又も目まひがして来たからである。もう次の日から雪姫は、体一つ動かす事の出来ない重病になつてしまひました。その頃、菊ちゃんを引き取つた、親切な夫婦の家では菊子が青い顔をしてベットに、横たわつてゐるの、と、菊ちゃん熱があるからと、云ふの、今日も、この寒空に外へ出て、何をしてゐるの、女中が探して菊ちゃん、雪の上にはたはれてゐるのを見つけたから、良い様なもの、もしも、誰にも見つけられなかつたら、菊ちゃんは、死んでしまふ所でしたのよ、菊ちゃんは、おぢいさんだから、此のお母さんの云ふ事が、良く解るでしよう」と、云つてゐるのは、優しい菊子の義母さんである。その夜から菊ちゃんの容態はだん／＼悪くなる一方、醫者も首を横に振る様になりました。可憐な菊ちゃんの前には、もう死の門が待つてゐるの、と、其の頃、豪華な城の一室で電燈の幾百と輝やいてゐる下で、眞白な寝具に、まかれてゐるのは、雪姫の神々しい姿の姿でした。そこには國王も、名士の連々も何十人の醫者も、女中も泣きつづかれた、小夜姫も皆息をひそめて、刻々と死に近づくと、雪姫を見守るのでした。やがてかすかに口が動いた。「菊ちゃん、たつた一言、それは優しく、小夜様でもなかつた。立派な威嚴のある實の父、國王でもなかつた。貧しい時から、苦しさ、樂しさを共にした菊ちゃんでした。唯「菊ちゃん」の一言だけで

母、それは神の創造し給ふ偉大なもの、一つである、愛は尊い併し世に母の愛ほど、絶対に至純で、熱烈な愛が存在するだらうか、私共の母は、必ずしも學者ではない、美人ではない、しかし私共にとつて、この世の何ものにも代へ難い、尊いなつかしい存在であるのだ。日々の母の愛は最も雄辯に我々の進むべき道を示してくれる。子の幸福を心から祈つて居てくれる母、その尊い心に私は心から感謝を捧げている。世の物凡てが自分から離れ去つて行く時でも、母は最後まで子供を棄てない。假令我々が、母をすてても、そして勝手な振舞をして、世の中から、みすてられても、孤獨になつた時、想ひ起すのは暖い母のふところであらう。そして母のふところに戻つた時、母は何も云はずに唯優しく傷ついた疲れた心を勞つてくれるであらう事を信じて疑はない、我がままな私は母の氣持を充分察してゐながら、何か他で腹の立つ事があつた時など、母の氣持を素直に受入れずに、わざ／＼逆つたりする事がある。併し母が私の我がまゝに應ぜず、やつぱり優しくされる。他に何もなくて私は幸福である。そして母の愛を自覺すればする程、この様に母を愛へて下さつた神の愛に感謝するにつけても、母なき人が何にもまして不幸なる事を考へ、本當に氣の毒だと思ふ。しかし又母あつて母のありがたさを自覺せぬ人は、それにもまして氣の毒な人だと思ふ。何故ならば世の中の尊い美しいものをその人は認める事が出来ないのだから。私は母なき人に母の愛を知らせたい、若し私に、その様な尊い仕事を許されるなら、私は彼等の友となり母となり姉となつて、それ等の人の寂しい心を勞つてあげたい。これは私の願ひである。

「お母様」「お母様たら」
母は突然の大きな聲に驚き、縫物の手を休めて顔をあげたが、美智とわかるとやさしく微笑んだ。
「大きな聲をしてびっくりするぢやないの」
と母はやさしくいらんだ。
「だつて、だつて」
「何あに美いちちゃん」
「あのねえ……あのね買つて頂戴よ」
美智は、母の顔をまもりながら、甘へた口調で云つた。
「買つて頂戴いって何を」
美智は何をと思ひ浮へて
「ねえ、いゝでせう、買つてね、お母様」
「まあおかしな美いちちゃん、買つて買つて、つて何ほしいの」
「はい、もの、前から約束しても、ちつとも買つて下さらないんですもの、美智つまんないわ」
不平さうに、美智特有の鼻をならす。
「だから聞いてゐるぢやないの、お母様には、一寸も見當がつかないよ」
「つまんないわ……」
「ホ、いやな美いちちゃん、お母様ばつかりせめないで、はつきりおつしやい」
母は、半ばじれつたさうに、かう云つて、美いちちゃんの望むものは何かしらと、あれをこれと心にゑがいた。
靴かかし……いや此の間買つたばかりだもの、カバン、さうぢやないらしい、おさげどめ、日傘人形、あゝさうさう、お隣りの貴美子さんが大きなお人形を持つてゐて、よく美智が欲しがつてゐる

た事を思ひ出した。
「美智わかりましたよ美いちちゃんのほしいもの」
美智は急に明るくニコ／＼して、
「何あに、わかつたら買つて下さる」
「ホ、虫の良い事ね。お人形でせう」
「アラ、うそよ」
美智は母に、圖星をあてられて、ねだつたのがはつきりなり、それでも、うれしさうな笑は、かくす事が出来なかつた。
「ほしくないの、うそでせう、美いちちゃんの顔にちやんと書いてありますもの」
と云つて、母も満足さうに笑顔で、美智の顔をぞき込む。
「買つてあげますけれど、お父様にうかつてみなくては」
「お父様は、だめよ、お父様いけないつて、おつしやるにきまつてゐるわ」
又小犬みたいにク／＼云ふ。
「ママ赤ちやんみたいな子ね、駄々ばかり云つて、お母様の云ひつければちつともきかないで、自分の事はなんでも通すのね、これからはちやんとお手傳ひしますか」
母の顔を、不平さうに見ながら
「美智なんでも出来るわ、此の間だつて、ちやんとお洗濯しましたわ」
「ホ、たつた一度ね、お母様は、雨が降るのぢやないかと心配しましたよ」
「しらないつ、買つてねえ、買つて下さる、オ、嬉しい可愛いものをね、貴美ちゃんよりも良いのね。いつ行くの、今夜行つて買つて下さる」
母はうれしさうに、はしやく美智の後姿を満足さうに見つめた。
それからは、どこに行くのにも美智の胸には、派手な友禪模様の着物を黒襟をかけ、長いお袖を胸に合せた可愛い、お人形が美智の胸に、抱かれてゐた。

午後の日課を終へて

二年 吉田美津江

机の上を一寸片付けて庭に立ち空気を胸一杯吸つた。そして今日一日を有利に過したかどうかを考へながら四方の風景に見とれた。太陽はすでに太平山の彼方に半ば落ち掛つてゐた。前の電線にとまつて居る五六羽の雀はかざるがはる小首をかしげながら、何かさゝやき合つてゐる様に見える。其の内に一羽が鳴きながら飛び出すと後から次々に續いて西の小川の岸の笹藪に姿を消した。東の松林の上からは鳥が五羽七羽と連立つて雷電神社の森の方へ幾群も亦幾群も、どうして後れたか群を離れた只一羽しきりに左右を警戒しながらいそ／＼と飛んで行く、何んとなく淋しそうに思はれた。鳥の氣持も私達と同じではなからうか。ぼんやりと雲の色の變る夕空を眺めてゐると疎開して居る山崎さんの家には電燈が光つて居た、刻々と深み行く黄昏の内に今まではつきりと聞えて居た遠織機織の音もびつたりと止み澄みきつた空には星が二つ三つ光つて居た。

物を乞ひ

三年 原田 節子

師走のある寒い日の夕暮であつた。色褪せた青のレインコートに体を包んだ、みすぼらしい一人の女が隣の家台所のガラス戸を力無く叩いてゐた。

もう十九にはなつてゐるだらう、亂れた油氣のない妻の毛が、瘦落した頬を隠すやうに、風に舞つてゐる。「御免下さい。御免下さい」
素足に切れかゝつた草履をつまかして、右手に小さな風呂敷包みを下げた女は、何度も一瞬を掛けて、内からの返事を持つ様であつた。だが、かすれた女の細い聲は兎もすると、木枯しに泣く足元の落葉の音に消されがちで、窓邊に佇んで、視線を投げて居る、私の耳にさへ入らなかつた。
「居ないのかしら」女は、獨語を漏して、中の様子を探るやうに、ガラスに體を靠れた。
そして、軽い吐息と共に肩を下げた。
「姉ちゃん駄目？」その時十二、三の男の子が垣の間から首を出して言つた。
「え、居ないらしいわ」
「腹がすいたなあ。何處か他所に行かうよ」
「え、でも他所ぢやねえ……何時も此の家ではかりらうんだもの」
「だつて、居なけりや、しょうが無いぢやないか、俺は腹が空いて……」
破れた學生服の證しに兩手を入れて、男の子は、寒さに、震えながら言つた。
女は、黙つて考へ込んでゐる様子だつたが、その臉には、露が光つてゐた。

弟であらう、その子の飢えに心を煩すのが、女は、其處を立ち去らうともせず、俯向いた儘、男の子の肩に手を掛けた。
「どうしたの、姉ちゃんも、腹が空いたんだらうね、どうしたの」
覗き込む様に見上げたが、女の暗い顔に口を噤んだ。冬の日は、暮れるのが早い。あたりは黒いものに掩はれて、段々二人の姿もかすんで行く。
女は、しばらくして、思ひ切つた様に男の子の手を取つた。
「行かうね。大丈夫よ、心配しなくつても姉ちゃんに食へなくても、英坊にだけは……」
女は語尾を濁した。
「うん、俺、腹空いても、平氣だよ。俺腹空いて居ないよ」
「英坊！」
女は、兩肩を激しく震はせて、男の子を抱いた。
「ありがたう。ありがたう英坊。姉ちゃん……姉ちゃん」
二人の泣聲が背圍の静寂を破つて流れた。そしていつまでも消えなかつた。

夜 想

二年 雫 志津子

春も夏も秋も水の様に通き去り、木枯吹き青白い半月が冷たく不氣味に照り野山を銀世界にする冬が北の國から飛んで来た。晝間は日光連山おろしの風に通行人の帽

石をばふる
専攻科 中山享子
幾度か石をばふりたりしが
谷の木にはとゞかず
いくたびも
いくたびも
石をばふりたりしが
谷の木にはとゞかず

◇(墓 参)◇

専攻科 手塚 ヒロ

忘れもしない、しとくと春雨の降る三月も終りに近い日だった。

「おやお元気でね、貴女の成功を祈つてゐますわ、しつかり勉強してね、都會の人達に負けない様に、ぢや此れで失禮します、さやうなら」有難う、貴女の言葉を忘れずに一生懸命するわ、體をくれん、も大切にね、さやうなら、「私の上京の日友と二人驛頭で互に名残を惜しみながらかはした別れの言葉だった。其れから三年の月日が夢の様に流れ去つた……」

其の友も今は此の淋しき墓に安らかな永久の眠りについでるのである。

思へば幼き頃の幻影がかはる、涙の狭霧の中に浮ぶ、赤い靴をはいで新しい希望を胸に抱いて入學した日、遠足の楽しかつた事夢中でマリ投げなどして日の暮れるのも知らずに遊んだこと、そして最後に驛頭で「しつかり勉強してね」と言つた言葉も既に遠い過去の夢となつてしまつた。

一度故郷に歸つてみれば、彼の人ばもはやわが友ならず、否、すでに此の世の人ではなくなつてゐたのである。

かはりはてたる友の墓前にたゞすみながら……その日は丁度新嘗祭で空は青々と晴れ渡り、午後日光が軟く墓地に満ちてゐた。秋は此處にも、紅に照る櫻の葉がはらりと落ち、垣に咲く山茶花の香りほのかに、線香の煙、立ち上るあたりには



▲私▲

一年 松本 タケ

冷えんとした月光を浴びながら、私は戸外に立ち獨り考へた。人と生れたからには性質の美しい人にならうと、優しき其の勞を厭はぬ同情に富み人道を尊び、好んで人の爲に盡す、如何なることをも、楽しんでやる此の様な深山の美德を備へた立派な人にならば、私は常にこう思つてゐる。願れば早や十年餘の年月を過ぎたが、今まで自分の踏んで来た道はどんなであらうかと考へると非常な物足りなさを感ずる。今日と言ふ日も、今年と言ふ年も矢の様に移り去る。私達は其の間に其れだけの進歩をしなければならぬ。優しい祖母や父母に、兄達に「ター坊」と呼ばれて可愛がられ何の不自由もなく、大きくなつた私である。しかし天はいつまでも私に幸福を與へて置かなかつた。

風に送られ月にまもられ、又多くの人の永久の祈りを浴びながら今も忘れ得られぬ優しい母は静かに天に昇つていつてしまつたのである。其の時の私の悲しみ、それこそ生れて如めての大きな悲しみであつた。男の兄弟の多い中に一人女と生れ、幼い頃からわけても母は私を可愛がつて呉れたそ

小鳥の聲が幽に聞える、今彼方に聞えた車の音も微かになつて消え、後の静けさは一しほ増し、唯遙かに響く、川瀬の音のみが此の寂寞たる天地に和して彼のうづつと此の夢と相共に人生の哀歌を奏するかの様である。

と、一陣の風、頭上を過ぎて櫻の葉が、亡き友の墓標にはらりとひるがへつて落ちていつた。

親しき友みな先だち行かむ

小暗き浮世に一人残りぬ

み胸によりつゝ眠らせ給へ

永久のあらしに醒むる時まで

思ひでのカーテン

一年 要 田 キヨ

私が國民學校二年、長岡にいた時の事である。夕飯をすまして二階に上り机に向かつて勉強をしてゐたがいつの間にか居眠りになつて居たのだらう。

「ガサツッ」

と云ふ物音に、はつと目が覺めた。見ると、ガラス戸がしまつて居るはずなのに、カーテンがゆれて居る。私は水をかけられたやうにぞつとした。

「ガサツッ」

またゞ。それがカーテンのゆれるのに、調子を合はせて居るやうだ。ますます恐しくなつて來たので下へ逃げやうとしたが。逃げるどころか足がふるへて一歩も歩けない。とカーテンのゆれが端か

ら端へと行く。あやしい物音もついて行く、「ガサツッ……」

カーテンが急にはげしくゆれ出した。

私は夢中で誰かを呼ぼうとしたが聲が出ない、其の中にやつとカーテンのゆれが、しづまつて來た。と思つたのはほんのちよつとで、またゆれ出した。私はやつとの手をのびして物指を取つた。若し何かとび出したら、なげて逃げる身がまへをした、だがそれを投げる力がなかつた、私は、どうしたらよいかと迷つたが、勇氣を出して、精一杯の力で消しゴムをカーテンに投げた。

「ガサツッ」

「バリッバリッ」

今度は木をひつかく音だ、私は一層慌て、インクスタンドに手をかけた。

「バリッバリッ」

今や怪物はいきり立つてあつちへ行つたり、こつちへ來たり大あばれにあばれてゐるらしい。

「トン」」と姉の足音が階段を上つて來たと思つたら、ぱつと部屋の電気がついた。瞬間あわてふためく怪物の正体が、カーテンにはつきりうつつた。それが何と家の猫ではないか私は思はず。長い息をついた。

「バリッバリッ」

考へて見ると此の猫は家の猫で隣りの犬に追はれて屋根に逃げ開けつ放しの天窓から私の部屋に落ちこんで外に出られずカーテンとガラス戸の間をうろつて居たものらしい、そこへ私が消しゴムを投げたので一層あはてたのであらう戸を開けて逃がしてやつたあとを見ると戸は爪のあとでちやくちやであつた。

うである。冷たい世界をじつと照らす清いあのお月様を見てゐる母が「い、子におなりなさいよ、心の美しい人になるのですよ」

と呼びかけている様な気がする。立派な人にならう、私によつて淋しい家の中を明るくし祖母や父を慰めてあげなければいづつ心に誓ふのである。

もう幾つ寝るとお正月
お正月にまりついで
追羽根ついて遊ばせよう
早く來い、お正月

除夜の鐘

二年 吉田 静子

早除す所敷時間となつた。多忙に暮れた今日も、省り見れば今年最後の日ののだ。一家團圓の内に夕食を済ませ除夜の鐘を、ラチオに耳を傾けた。落語、歌謡曲、萬歳浪曲と暮れ行く年を惜しむのか、正に不夜城の演藝會である。時計の針は刻々に進みアナウンサーの報ずる十一時五十九分となつた、私は躍る心を押へつゝ待つた。昭和二十二年午前十時……同時に除夜の鐘は鳴り響いた。一つ……二つ……三つ……何んとも云へぬ神々しさ。思へばこの神々しくも又もの淋しき釣堂の鐘の音、其の後からは美しき平和な新年が明けつゝあるのだ。私は妹にも聞かせ様と思つて起した。父母、兄弟妹、皆感激に打たれ去りし昭和

夏の夜

四年 大山 静子

夏の夜は七時頃やうやく訪れて來る、暑い、と言ひながら一日を過ぎて來た体を休める夜である。湯上りに縁臺に腰を下せば風がほゝを撫でて行く。その氣持の良いた事、よく入は言ふ「壽命が五年のびた二十

年のびた」とか。本當にそんな気がする。蠅の聲やうやく遠ざかつてあたりは夜の空氣にとざされて來た。縁臺に坐つてあると、蚊が足をなます。團扇で蚊を追ふ、けれどもそれが氣にならぬ程自然に動く、たま／＼蟋蟀の涼しげな音色が、聞えて來る。縁臺に腰をかけてゐる人は皆耳を傾けしげら／＼言葉がない、近くの家々の前に一人、二人と涼みに出てゐる黒い影が見える。電燈は暑いために消してあるのがある。電燈は暑いために消してあるのがある。電燈は暑いために消してあるのがある。電燈は暑いために消してあるのがある。

わびしさにひとり窓邊に寄りて見の遠くきこえる祭のはやし

二年 高野 恭子

もろこのの細葉に光る露みえて今宵の月はかややかにけり

二年 岡 田 弘

二 年 牛 田 菊江

しつとりと夜露にぬれて校庭の木馬つめた

二年 黒崎 昌子

南天の赤のつぶらみ我が庭の見ゆるものと

て多深みけり

名曲鑑賞 (第二回)

「月光の曲」 (A)

この名曲鑑賞の欄は個々の名曲に就いての物語とその演奏の鑑賞について智的な音楽愛好者に科学的でありしかも平易な興味ある讀物を供し話題の一つを興へると共にこの事に依つて名曲に對する本校生徒の一般的關心を昂め、より一層の名曲音楽に對する興味を刺戟することに目的を置いて居るのである。

それ故に先ず最初にベートーベンの「月光の曲」を又はシンホニーの王であるベートーベン自身なりを諸姉と共に研究し「月光の曲」に對する私達の謎の雲を拂ひ誤解を拭つて正しい姿を呈示し得ることが、私達の音楽文化の向上と擴張に幾らかなりとも貢獻出来得るならば、私達鑑賞班は無上の光榮とするところなのである。

では先ず最初に「月光の曲」とは何なるものであるかの概念に就いて述べて見る。世には名曲は多く、それを一々數へ上げることは到底出来得ることではないが、然しその中でも一番知られたホヰエラーなるものを挙げればなるまい。「月光の曲」といへば、音楽を良く知らない者でも勿論名稱位は知つて居るし、少し物憶えの良い人ならば小学校時代の教科書で讀んだこの曲の由來物語も忘れないだらう。しかしこの曲の本當の姿正しい由來その曲そのもの、構造などを良く理解し、之を正しく評價して居る人は案外少いやうである。

「月光の曲」は「月光ソナタ」とも言ひ、何れも英語の「ムーンライトソナタ」か獨逸語の「モントシヤインソナテ」の譯である。作曲したのは言ふまでもなく、

朗の後見者となり全ての苦惱を経験した。そして彼自身は愈々内觀的になり所謂第三期が始まつたのである。

第三期には第二期に於ける様な開聲的な様式から、脱して平靜な、しかし深刻な作品を書いた、即ち第九交響曲莊嚴ミサ最後の五つのソナタ、最後の六つの絃樂四重奏曲の様な深刻で崇高な不朽の名作がそれであり、而して一八二七年三月二十六日に享年五十七で死去した。

地上於ける彼の五十七年の生涯は決して永くはなかつたが、その事業は永遠に世界に輝きその音楽は人間の世が續く限り人類の至寶とも言ふべきであらう。

以上ベートーベンに就いて結論づけるならば、彼はハイドンに學びモーツァルトに影響され、それ等の大家の所謂クラシック様式を最後のに完成したが、しかし他方に於てはさういふ音楽の傳統を破壊することも始め晩年には新興のロマン主義を取り入れることに努め、換言すれば一人でクラシック音楽からロマン主義音楽への過渡を示すのである。要するに第一期の作品即ちクラシック精神に依るものは、純情清冽であるが第二期のものは遅しく闘争的であり、第三期のものは平穩にして深刻であると言へる。

音楽作曲の大家ベートーベンであり、彼は之をピアノ用のソナタの一つとして書いて作品二十七の第二號としたが、自分では「月光の曲」などと呼ばないで、唯幻想曲風のソナタと記しただけだつた。嬰ハ短調の美しい曲であり、それが「月光の曲」となつたのはドイツの音楽批評家の一人が、この曲の第一章にスワイスのルツェルン湖に映ゆる月の光を見たと思像したことから始まり、それに色々な物語が結びつけられて、この曲は有名になつて行つたのである。次に作曲者即ちベートーベンの生涯に就いて開べて見よう。

ベートーベン。正確に言ふならば、ルートヴィヒ・ファン・ベートーベンと言ふまでもなく、世界第一の大音楽家言ふところの樂聖の一人で、ドイツの西南部にあつてライン河にまたがる小都ボンに生れた。その血統から言へば、純然たるドイツでなくフランス系の人であるが、父も祖父もドイツに生活し、自分も幼少からドイツの生活をしたので、その精神も感情も殆んどドイツ化され、その上青年になつてからは主としてウイーンに居たのでベートーベンは全くドイツ人と言つても良い譯である。

しかしベートーベンは堅苦しいドイツ人にはなり切れなく、當時の革命思想の影響を受け入れて自由主義の民主主義に傾き、且つ進歩的な思想に共鳴して居つたので、従つてその音楽も著しく自由で進歩的である。ベートーベンの父はケルンの選帝侯の爲めのテノール歌手をして居り、勢力もあり權威も高かつたが、強い飲酒癖があつて収入をアルコール代に注ぎ込み生活苦となりそこで少年ベートーベンを第二のモーツァルトに仕立て上げて金と名譽を同時に獲得しようとして、その爲に教育は頗る亂暴に行つたが、その結果進歩は著しくつた既に八歳の時にはフライオリオンを演奏し、十一歳の時にはベツへの「平均律クラヴィア」を自由自在にこなす

ことが出来た。それから色々な人の指導を受けたが、十七歳の時にはウイーンに出てモーツァルトを驚かせる間もなくウイーンを生活中心地としてベートーベンはボンには歸らなかつた。

ウイーンではまずハイドンその他から作曲を學んでゐたが、一方では貴族社會で演奏者もしたが謂はばこの時迄は大體幸福だつた。しかし一八〇〇年頃からは恐るべき運命の壓迫が加はり、第一に音楽家にとつて致命的な耳疾が彼を苦しめ、勿論あらゆる手段を試みたが悪化するばかりで一時は全く絶望して終ひ、ウイーンの近くのハイリゲンシュタットといふ處で遺書を書き之が「ハイリゲンシュタットの遺書」として知られて居るものである。それと同時に彼は自分の先天的な使命創作者としての貴い使命を完全に果す迄は、決して死んでほならないと感じた。そして彼はそれから從來に倍する力を以つて作曲に邁進した。

かくして「ハイリゲンシュタットの遺書」はベートーベンの生涯と藝術の重大な轉機を劃するものであり、即ちそれ以前には多幸な青年として専らハイドンやモーツァルトの傳統に從つた音楽、つまり全くクラシック的で穩健な作品を書いて居たが、これからは完成された技巧と成熟した心とを以つて、恐しい程の充實した力強い音楽作品を生み出す様になり、彼の研究者は普通にその遺書の前を第一期としその以後を第二期とする。

第二期には第三交響曲を初めとし、非常に多くの著名な作品を書いた。その間には幾回か戀愛もしたし喧嘩もしたが音楽家としての名譽は高まり地位も固まり一八一四年の頃は彼の人氣は頂上に達した。

しかしこの頃からは全てが悲慘となり、耳疾は益々悪化するし、年はとり親しき友は去り世人の嗜好は變化して終ひ流石のベートーベンを以前の様に受けなくなり、一八二二年頃には完全な聾者となり、且つカアルといふ

小さな大豆

三年 武井 幸子

小さな大豆
ちいさな大豆
ばつちりあいて
ひいろい お空を
仰いだら
可愛い、子雀め
鳴いてゐた

小さな大豆

ちいさなお目めを
ばつちりあいて
たあかい お空を
仰いだら
白い お船が
浮いてゐた

童謡

せ ぎ

一年 安 生 節
背戸の竹藪 人が来る
ザク／＼霜柱 踏んでくる

山 鷹 集

春淺み庭の梅が枝香りなく花とまぎらふ夜半の淡雪
世のちりも叫びもよそに澄みわたる空に匂ひて梅は咲くなり
どこやらに春の心の漂ひて牡丹に似たる雪舞ひ落ちる
つばみやふくらみ初めし沈丁花のほとりに今朝を降りしきる雪
さけびつゝ子等の遊べる庭のべに雪降ると見つ部屋にこもらふ
電線に風のかゝりて子等はなし冬の夕暮木枯の吹く
高々と空吹き晴れて歩みゆく人もまばらにこゝろ冷き
夕やみの迫りて歸る町はづれ遠き煙の雲と消えゆく

相馬清五郎
川保南軒
須賀華子
新井キク
田内 侑

詩

りんりん

二部二年 戸室 三枝
さく／＼とリンゴをかみつゝ
青空を眺めて
私の心は 何か.....
希望にふるふる

コロコロ花

二部一年 御子貝トヨ
風つめたき冬の夕暮
黄色なるコロコロ花は咲けり
月出でし
河の岸邊に
コロコロ花は咲けり

午後

二年 葭葉 君子
蟬が鳴いてゐる
焦げつくやうな
夏の午後
私の家は
降るやうな蟬の聲で
うまつてしまふ

専攻科 池田 幸子
捨てられし芋の屑さへひろひ行く人もありとか
遅配つゞきに

二年 川中子ミツ
流れ星向ふの山の空遠く流れて消えぬかなしかりけり
老ひ父の肩を揉みつゝそのかたのあまりうすきに涙あふるも

悔歌

小林 廣吉
自己満足の歌は青野に沈みはて眞夏日ざかりわれは呆け立つ
決断のぶる思念に慙ちつゝ幾夜すぎしか今は歎かむ
きれぎれの夢果てし夜を桐の花ほとり地に墜ち歎きなむとす
一匹の虫のねむりも安かれと時にはねがひ夏の夜を睡る
夏川のひかり流るゝ岸に立ち歎き伏したるわが影をみつ
慙慙の幾日かへしを秋深みさみしそなる黄菊白菊
秋小花咲く野ゆきつゝ悔やまぬ命燃ゆると云ふもかなしや
秋雨の降りけぶる夜を絶えてるし情熱沸らし歌よみつがむ



静けさや落葉なきゝ草の上
庭隅の初ねかある今朝の霜
晴着纏ふ母の老眼鏡のくもりかな
雪降りてかすかに見ゆる羽黒山
水仙の香りほのかに胸なつく
疎開してせまきわが家にかやひろし
夏の野に大きくまわる水車かな
踊りたや足を早める太鼓かな
月の夜の光りにわれし野菊かな
夏の野に草刈る影や晝の月
學校のかへり吹雪となりけり
秋空へ學徒もふるふ銀の音
ゆく年の月ひるのこゝろにけり
首たれて夕立あびるトマトかな
おみなへし活けて迎へる亡きみたま
國境の山みな白く年暮るゝ
夕風にみなこぼみゆく寒さがな
足洗ふ川面にゆれるみつしき草
戸一枚開けてまはゆし庭の雪
敗戦の春や淋しき松飾り
夕立に花の流るゝ瓜畑
厨邊にたりたり近し蟬の聲
専攻科 葭葉民子
二部二年 高橋 セイ子
二年 市島 トシ子
一年 植原 弘子
一年 安達 千恵
四年 岩松 和子
二部一年 根本 ミキ子
四年 北條 キヨ
二部二年 小畑 ミチ
二年 市坂 信子
二年 杉本 美代子
一年 杉本 美代子
四年 高木 安喜子
二年 大塚 智子
二年 鈴木 節子
四年 桑川 淳子
四年 石塚 泰子
二部二年 小池 トシ
二部一年 野尻 サト
二部一年 桑川 秀子
専攻科 伊藤 照子
三年 中島 壽美子
専攻科 山本 トシ子

學日誌

- 自昭和二十一年四月一日
至昭和二十二年一月卅一日
四月 月
五日 入試開始
一〇日 合格者発表
一五日 始業式
一八日 入學式舉行
二八日 天長節學式
五月 月
一日 灰野教諭新任式
校長任命
級長任命
四日 遠足
一日 寺内、濱中兩教諭告別式
二〇日 身体検査
二七日 進駐軍教育係視察ノタメ來校
六月 月
六日 眼ノ検査
七日 身体検査(八日マデ)
一二日 保護者會役員會
二五日 學校長校長會議(氏家高女)ニ出席
二七日 卓球級對抗大會
二九日 父兄會
七月 月
四日 家政科研究會へ北山、麻生教諭出席(鹿沼高女)
八日 全學年考査開始
一〇日 ナプス豫防注射
一三日 全校清掃
八月 月
一五日 終業式
二六日 第二學期始業式
二八日 學校長校長會議ノタメ出席(鹿沼高女)
二九日 身体検査(三十日迄)
九月 月
二日 運動各部結成式
六日 校舎内外大掃除
九日 大出教諭新任式(於講堂)
一六日 作新館高女ト排球練習試合
一七日 市立高女ト排球練習試合
二三日 父兄會評議員會
二五日 女子中等學校排球大會(本校々庭)
三〇日 家政科研究會ノタメ北山、麻生、波木教諭出張(第一高女)
十月 月
五日 専攻科足利機業工場見學
一部、二部全生徒鬼怒川遠足
二〇日 運動會
二五日 映畫「學問ノ自由」見學(於電氣館)
十一月 月
三日 明治節學式、憲法發布記念式、創立記念式
五日 運動部校内大會(庭球、排球、卓球、ソフトボール)
一二日 物象科研究會へ山本、清島先生出席(於太田原高女)
一六日 ソフトボール大會(於第一高女)
二一日 日光、湯元方面修學旅行(専攻科四年)ニ出發
二二日 二部二年出發ス
十二月 月
六日 海外引揚同胞援護資金募集ノタメ街頭進出(専攻科)

雨の町

二年 鈴木 信子
七日 私立中等學校聯合父兄會ニ山本、小林先生出席(下中)
九日 防犯講演會
一三日 學期末試驗開始(十七日迄)
二三日 父兄會總會
二四日 終業式、成績發表
一月 月
八日 始業式、定期券使用禁止
一八日 上級生活花練習開始
二三日 私立學校校長會議(於女園)
二四日 縣下校長會議ニ山本教諭出席

誓ひ

専攻科 永見 良江
日記を前に
私は誓つた
今年こそは
お前の
純白な胸に
悲しむと云ふ文字と
苦しむと云ふ文字とで
決して汚すまいと.....

校友會各部々報

【卓球部】

縣下女子中等學校、卓球部の最高峰たるこの名譽ある卓球部を受継いだ私達専攻科生は偉大なるホープを抱き、燃然として輝く、傳統に對する重大なる責任を痛感すると共に必勝の意氣に燃え起つたのであります。

第一回戦 第一高女B組 2-13 本校 準決勝 第二高女A組 0-13 本校 決勝 第一高女A組 3-2 本校

【庭球部】

英吉利の上流家庭によつて培養され發達して來たと云ふ庭球が、ロンドンテニスの上で輸入されて以來數十年、輕快で而も上品なる此の球技は忽ちの内に全國內に波及した。

【排球部】

戦災と言ふ大きなショックに雖々しくも立ちあがつた本校は、學會を此處四十部隊跡に移してより復舊目覚しく運動部に、學藝部に一躍發展の道を辿りつゝある。

【ソフトボール部】

往時輸入されたソフトボール競技は結局「男女七歳にして席を同じうすべからず」の風潮のために衰へ、野球、庭球、卓球等の隆盛の前に影をひそめてしまつたのであるが、終戦後女權擴張の波にのつて興隆の道が開けたのである。

○部員

- 二部二年 1安岡 タケ 2岸 喜久枝 3高橋 トシ 4野口 江子

【文藝部】

紛糾、虚脱の仄儘の中にあつて敢然颯起のトップを切るものは何處の土地でも藝術復興の姿に見受けられます。

な氣が何れ、遠く古の、廣く世界の、深く人生の。高い歌聲の、先導者は實に書物でありませぬ。そして眞の友であります。

Table with 4 columns: 小, 文, 哲, 教. Rows: 部, 冊数, 計.

○部員

- 二部二年 専攻科 渡邊靜江、西宮富美子、高波かなる

【英語研究部】

英語は世界に普及してゐる。だから萬國共通語ともいふ各國間の商取引、即ち貿易上の必要語として使用されてゐると聞いて居ります。

【厚生部】

厚生部は次の三班に分かれ、各學年二組六名の係員は、専攻科生の良い指導によつて活躍して居ります。

學校通信

卒業生の皆様今春の中頃にでも同志會を開きたいと思ひます。戦災にて思ひ出懐しい河原町の校舎を失ひ、以來宇工、第一高女、市立高女と諸々を轉々し今年の四月よりは四十部隊跡に移り、高等女學校として新發足、内容面目ともに一新しました。



街

燈

現今の混濁たる社會に於て善と惡との識別は困難である。何が善で何が惡かと云ふ事は輕々に判断出来ない。以前の善人が惡人になり、惡人であつた人が善人になつてゐる。自分は善なりと信じてても社會人が惡だと云ふ場合もあるし、又逆な事もある。石橋財政はインフレを助長すると云ふ聲を聞くが、藏相自身は、安定しつゝありと云ふ。氣が變だと云へば、藏相は國民の方が餘程變だと云ふ。人はその顔形が皆違つてゐる如く、思想も十人十色である。自分が正しいと信じて、その道を歩めば、甲は右の道が正しいと云ひ、乙は左の道こそと云ふ。——何れも眞理であり又何れも違つてゐるかも知れない。その人自身の觀點の相違である。「自己を見定めよ」とは識者によつて屢々唱へられた。吾々は「自己」をより良く見定め「自己」の命する通り勇敢に辛直に大道を進まねばならぬ。現今の如き時代には、やゝもすれば「自己」を失ひがちである。最後の勝利者は、いつも最後迄「自己」を失はなかつた人々である。古書にも曰く「唯本心の好む所に從はんのみ」と……。

——大出光威——

Table listing authors and their works, including names like 青空の遠くに續く雪の山, 初日の出一家揃つて拜しけり, etc.

編輯後記

★ひめまつ創刊號發刊に際し何故「ひめまつ」なる誌名を附したかを明にして置くのも冗言ではないと思ふ。諸姉が熟知しておられる通り校歌に「ひめまつ小松」と云ふ一節がある。その優美な姿に似ず風雪に暑寒にめげず毅然として千古變らぬ青色をたゞえたるひめまつは、諸姉達の進路に何等かの示唆を與へてくれるのであらうか。「ひめまつ」とした所以も實に此處に存するのである。

ひめまつ

創刊號 (非賣品)

Publication information box containing details like 昭和二十二年三月五日印刷, 須賀高等女學校内, 發行所 須賀高等女學校文藝部, etc.

